



綾威送別

四

U 5
5011
4





稜威道別卷第四

日本書紀神代上之二

次生^ニ海^モ次生^ニ川^モ次生^ニ山^モ次生^ニ木^モ祖^ニ句^ク句^ク廼^ノ

馳^{ナラ}次生^ニ草^モ祖^ニ草^モ野^ノ姬^ノ野^ノ名^ハ既^{カク}而^テ伊^ハ奘^ハ諾^ハ尊^ハ

伊^ハ奘^ハ冉^ハ尊^ハ共^ニ議^ス曰^ク吾^ハ已^ニ生^ス大^ニ八^ノ洲^ノ國^ノ及^シ山^ノ

川^ノ草^ノ木^ノ何^レ不^レ生^ス天^ノ下^ノ之^ノ主^ノ者^ノ歟^ハ於^テ是^ニ共^ニ生^ス

日^ノ神^ノ號^ス大^ニ日^ノ靈^ノ貴^ノ屢^ニ咩^ス能^ク武^ク智^ク靈^ノ音^ノ力^ノ丁^ク

705
5041

反一書云天照大神一此子光華明彩照
書云天照大神日靈尊
徹於六合之内故二神喜曰吾息雖多未
有若此靈異之兒不宜久留此國自當早
送于天而授以天上之事是時天地相去
未遠故以天柱舉於天上也次生月神一
云月弓尊月夜其光彩亞日可以配日而
見尊月讀尊
治故亦送之于天次生蛭兒雖已三歲脚

猶不立故載之於天般櫟樟船而順風放
葉次生素彥鳴尊一書云神素彥鳴尊此神
有勇悍以安忍且常以哭泣為行故令國
內人民多以夭折復使青山變枯故其父
母二神勅素彥鳴尊汝甚無道不可以君
臨宇宙固當遠適之於根國矣遂逐之

○次生海云云此ハ上生大洲一次生吉備子洲之也

稜威道別

四之二

るはり連きしんバ次と云其ふ效て生海生川とけ
省るるれと此ハ皆神を生孫也海神川神山神と
心得べし。○木祖句と廻馳木ハ幹立の義也故神と
も然の稱せらる也萬葉十四尔左野乃九久多知乎里
波夜志とよらるハ草木の若芽の莖立とらると折
人待まら也又久君美良とよみらるハ莖韭也倭名鈔
尔豊ハク知ハクとあるハ蔓菁莖也台記尔饗膳莖立と云
るも同物なほへし此等ハ草の上なる木ハ全幹
まは名とまらる也大殿祭祀詞尔屋船久能遲命
靈コハナ也チとあり馳ハ尊稱と兼らる○草祖草野姫草ハ莖

總チの義也と云其を草野姫と申せる也上代大御
殿ミヤ神宮とも菅て草の用第一なれハ也野槌ハ野津持
の意也此類語尔二意あり一ハ上の句々廻馳雷迦
具土足名椎等ハ多稱タヘ辞のみ也山祇海神月讀等
ハ持モチの意也此等の美ハ毛智武智の約れり言わら
る次と合て可知○既而伊弉諾尊伊弉冉尊共議云
云如此ハあれとも此ハ女神の神カムサリメサ避坐ヒサるも以前の
あそ洲も此間尔火神水神土神等を略るるも右に
海川山及草木等に包たる一ツの語ありなり其ハ火
神を生坐と一限として女神の幽冥ふ入坐ス訖シのり

とゆゑ、此傳ふハ、皆省きて、日神ヲ御事と主と白せ
るふそ有ける。されハ此時、女神ハ既ハ神避坐て、後
けりなれハ、茲コ共ニ議リ終ルる也。即幽冥ヨミと、顯明ウツクシク
とハ、神量カミリヤウと申せるなりと。下、一書に、女神の既ハ
黄泉ハ入坐而後ハ文ハ、伊奘諾尊、伊奘冉尊云云、共
生日、神カミとあるハ合せて知ラん。昔より此、省サマ法ホウを
心得ココロエたりけるハ、此段を、次ハ、一書又古事記等と
は、いハ異なる傳へとしける也。其ハよく思シを
かゝるハ、當昔トウカキ此、古傳説の、あべり世ヨカケリ話ワタシハ
ア、代ヤふを、其大旨と、誰タレも、奴者ヌモノもあへりける

のハ、時トキありてハ、只其、要カネなる所と採ヒて語カるゝ也。
恒トコありし故ユありある。今、世ヨも、常トコに人ハ心得ココロエる。
俗事の上ハ、語カるゝ也。如此カク状サマハ省サマれ云クる也。多
みる。其コトと同じる也。此コトと心得ココロエる。ハ、肝要カネなり。なれ
ハ、既ハ總論ソウロありとて、あへり置ケつ。○生日、神カミ云ク。天照
大御神と、奉指ホウササなり。今、世ヨハ古學者ハ心ココロあり。直ナハ天
津日と指ササす。天照大神と申マはと心得ココロエる。ハ、此紀
ハ、如斯カク日、神カミと記キせる也。あへり難カしめれど、と
てハ古傳ハ違ヒハ、史典シテンに背サマけて、あへりて、いハるゝ心ココロなる
も、今正傳ハ據サて、此コトを、弁ワはる。天照大御神

と奉^ル稱^ヒハ直^ニ天^ノ日^ヲ申^ス以^テ非^ズ月^ヲ讀^ミ尊^ト稱^ス以^テ也
直^ニ天^ノ日^ヲ申^ス以^テ非^ズ月^ヲ讀^ミ尊^ト稱^ス以^テ也
直^ニ天^ノ日^ヲ申^ス以^テ非^ズ月^ヲ讀^ミ尊^ト稱^ス以^テ也
直^ニ天^ノ日^ヲ申^ス以^テ非^ズ月^ヲ讀^ミ尊^ト稱^ス以^テ也
直^ニ天^ノ日^ヲ申^ス以^テ非^ズ月^ヲ讀^ミ尊^ト稱^ス以^テ也
直^ニ天^ノ日^ヲ申^ス以^テ非^ズ月^ヲ讀^ミ尊^ト稱^ス以^テ也
直^ニ天^ノ日^ヲ申^ス以^テ非^ズ月^ヲ讀^ミ尊^ト稱^ス以^テ也
直^ニ天^ノ日^ヲ申^ス以^テ非^ズ月^ヲ讀^ミ尊^ト稱^ス以^テ也
直^ニ天^ノ日^ヲ申^ス以^テ非^ズ月^ヲ讀^ミ尊^ト稱^ス以^テ也
直^ニ天^ノ日^ヲ申^ス以^テ非^ズ月^ヲ讀^ミ尊^ト稱^ス以^テ也

因^テ河^ノ海^ニ持^テ別^レ而^テ云^ク云^ク大山^ノ津^ノ見^ノ神^ノ野^ノ樵^ノ神^ノ二^ノ神^ノ因^テ
山^ノ野^ノ持^テ別^レ而^テ云^ク云^ク大山^ノ津^ノ見^ノ神^ノ野^ノ樵^ノ神^ノ二^ノ神^ノ因^テ
山^ノ野^ノ持^テ別^レ而^テ云^ク云^ク大山^ノ津^ノ見^ノ神^ノ野^ノ樵^ノ神^ノ二^ノ神^ノ因^テ
山^ノ野^ノ持^テ別^レ而^テ云^ク云^ク大山^ノ津^ノ見^ノ神^ノ野^ノ樵^ノ神^ノ二^ノ神^ノ因^テ
山^ノ野^ノ持^テ別^レ而^テ云^ク云^ク大山^ノ津^ノ見^ノ神^ノ野^ノ樵^ノ神^ノ二^ノ神^ノ因^テ
山^ノ野^ノ持^テ別^レ而^テ云^ク云^ク大山^ノ津^ノ見^ノ神^ノ野^ノ樵^ノ神^ノ二^ノ神^ノ因^テ
山^ノ野^ノ持^テ別^レ而^テ云^ク云^ク大山^ノ津^ノ見^ノ神^ノ野^ノ樵^ノ神^ノ二^ノ神^ノ因^テ
山^ノ野^ノ持^テ別^レ而^テ云^ク云^ク大山^ノ津^ノ見^ノ神^ノ野^ノ樵^ノ神^ノ二^ノ神^ノ因^テ
山^ノ野^ノ持^テ別^レ而^テ云^ク云^ク大山^ノ津^ノ見^ノ神^ノ野^ノ樵^ノ神^ノ二^ノ神^ノ因^テ
山^ノ野^ノ持^テ別^レ而^テ云^ク云^ク大山^ノ津^ノ見^ノ神^ノ野^ノ樵^ノ神^ノ二^ノ神^ノ因^テ

照大神とのみ有て、此御名此例ありと難じしれど、
次く之、唯尊称のをもとを擧るふ就て、此御出顯條ふ、本
つ稱^トと出せらるるにこそ、ハあをれ、さうこそ此大御名も
一向ふ稱^トさぬあはあは、次、一書にも、天照大日靈
尊とるら、他書^{コトフミ}も多く見ゆら、倭姫命、世記ふ、大
日靈貴^{此云、於保此屢}、舊事本紀ふ、大日靈貴、よ、天
照大日靈尊、天書ふ、天照大日靈尊、よ、日靈尊、よと
名えて、此書ハ特ふ、始終貫きて然ら稱せり、古記記
典ふを、然り記せしも、けりきりし、又萬葉二、標本、
朝臣、歌ふ、天照日女之命、^{一云、指上}、天乎波、所知食登、
^{日云、指上}、命、天乎波、所知食登、

云云、了、神樂譜ふ、畫目、曲ありて、其歌曰、伊加波加
里与伎和左志、天可阿万、天留也、比留女乃加美乎志
波之登、米武、なと、けり、此等如、無恭記唱へなはけ、
其、神と奉慰^{カミアソビ}神樂に、争う奏せん、又月、神と月讀と申
以方ハ、諾^{ウベナ}ありて、己が歌文ふも用ひなうら、日、神と、大
日女と申、方を承^{ウケ}さるも、偏固あうあや、同^{ナカウラ}中天ふ、相
並て照し、孫ふを、一柱ハ、保ち孫ふまこと、一柱ハ、直
ふ天、日とせら、いつれも心も
さして今如此申、をば、大御神の神徳を、貶奉るやうに
思ふ輩あう人も知べ、うらなを、固^{モトヨ}と神語、竹音あう

といふべし。の証、たゞるらん。よくや直ふ。天、日、坐
々、日とも。日と主領して、普く天下に、大御光耀を放ち
み、即大日靈尊の照し、みへるなり。彼、光華明彩
即此、天照大御神と稱し、尊號ふ、乖はざれば、何う其
貴き、劣るらん。ちよと、ひふ本傳ふ、背けて、思ひ
惑ふ、めるらん。彼、橋、小門、御生殿も、脩ひ、あり、天、石屋
戸、段も、幼言ふ、随果て、人笑へ、れる癡説も、引出さ、
は、る、世ふ、然る癡説せる人、先づ、其天、日の大と、
何程、ありと思へ、らん。今、其、大抵を、云、ん、に、
信ふ、らん、天經或問曰、地、周、九萬里、而日、大、於、地、百
か、らん、と、

六十五倍、八之三、地、大、于、月、三十八倍、三之一、然、則、日、
大、于、月、六千五百三十八倍、又、五之一也、蓋、月、天、近、于
地、日、天、杳、遠、凡、人、目、所、睹、近、者、雖、小、亦、大、遠、者、雖、大、亦
小也、據、此、計、量、之、則、地、周、二千三百五十余里、云、云、又
張衡、靈憲、云、日、月、徑、當、天、周、七、百、三、十、六、分、之、一、天、周
百八萬里、除、七、百、三、十、六、當、千、四、百、六、十、七、里、云、云、今
此、等、を、信、む、け、あ、る、と、れ、と、凡、然、云、ん、ら、ん、大、き、と、
る、日、月、あ、る、と、わ、づ、れ、る、入、海、に、橋、小、門、を、生、出、
れ、よ、と、せ、ん、也、理、を、盡、げ、又、岩、戸、を、閉、て、隱、つ、れ、よ、と
云、類、ふ、至、て、ハ、掌、を、以、て、蒼、天、を、掩、は、ん、と、す、る、ふ、を、

ある心ありん人いよく思ふべらるどもあはるや
然らば大神の所知其日月ハ既ふ其時在つる云
久天初發高皇產靈尊神皇產靈尊此皇產以
て靈異出ぬしにて即舊事本紀高皇產靈尊の
兒中以日神月神を收たる是也これ更に浮く説
ふありは既ふ第三卷引つる顯宗紀三年二月月
神勅ふ我祖高皇產靈云云此間の文壹伎縣主先祖
押見宿禰侍祠と有て神名帳云壹伎嶋壹伎郡月讀
神社名神高皇魂神社も同紀四月日神勅ふ我祖
高皇產靈云云對馬下縣直侍祠神名帳云對馬下

縣郡高御魂神社名神阿麻呂留神社とあるふて
知べし此時勅給ふ本よりありし日月神の御魂
なる故高皇產靈尊の兒と告給ふははあ
る彼舊事紀月神下對馬縣主等祖も日神下
久壹伎縣主等祖と記しつるのみそ後人其所為を
る此ハ其侍祠と祖と神とを取違へたるものを
○送于大而授以天上之事右如く名る時ハ此等
乃文の然るべくやるを彼現ふ仰き見る日
月としてをさるる語どもあり○天地相去
未遠故云此ハ又現ふ仰き見る日月として添へる

談辭也。幼き兒といふとも。彼、大きれる日月を、い
はして送于天。くくんと。疑ふある故也。其、時未^タ天
地も遠く。ねい。長き柱に末に載せり。送るるつり
しらりと。所謂冊子地の詞とそんたう也。とれは近
世に釋ふ。此柱ハ。風也。風神、祝詞也。我御名者天柱國、
柱、神とあると引て云れど。其とも意趣こわくちうり。
○次生月、神^ヲ。此下ハ號^ス月讀尊とあるべし。舍人親王
此紀を撰む。孫と記。其、本書に。此四字脱しはるん
由に。分註ハ。月讀尊ハ御名と。引^キくも人孫といふ
るべし。下にもさる。例あり。又月夜見と。月讀とい。言

と。同じるをたれども。文字かまれば。音の上^リ下^リ異^{コト}なり
故あるべし。舊事紀にも。文字かまれば。並べて
出せり。多うり。さる。萬葉也。月讀^{ツクヨミ}壯士^{ヲトコ}。月人^{ツキヒト}壯士^{ヲトコ}。左佐
良^{ウエ}授^{ヲトコ}壯子^{ヲトコ}とよめり。内宮儀式帳也。月讀^{ツクヨミ}命^{ノミコト}。御形^{ミカタ}。馬^{ウマ}
乘^タ男^ヲ形^{ノカタ}。著^キ紫^{ムラサキ}御衣^{ミカドノキ}。帶^{オビ}金^{カネ}作^ヲ。大刀^{タチ}云云とるゆ。此、他のり
と。し。と。日^ヒ神^{カミ}條^ノと合せて心得べし。○光彩^{ヒカ}亞^ヒ日^ニ。此、語也
據^ルと記ハ。月ハ月保^{ツキホ}とせ。光^{ヒカ}あり。し。日^ヒ中^ニ消^キ孫^ノ也。
夜^{ヨル}晝^{ヒル}持^テ別^ケ孫^ノ。所以也。漢國人の。月ハ本^ホ光^{ヒカ}耀^カなり。日^ヒの
光^{ヒカ}耀^カを受て照^ス也。なりと云る也。世^ヨ弘^コなり。後^{ノチ}世^ノ乃
人^{ヒト}也。然^カの^カ思^フくと。神^{カミ}の御上^{ミカドノカミ}と。争^カり測^{ハカ}る^ル志^シらん。

○生蛭兒。此兒の予既出。更に此も語りよせ
たるを。三歳脚不立と云と。素戔嗚尊。以哭泣為行と
云に合せん。下。一書も同之。○天磐櫛樟船。此
船の名義ハ下出。此に蛭子を載て。順風放棄と云
る。ゆゑも上代を汚穢たる者。罪ある者なりと云
然らして流し棄るが。刑の極みありまらし。中古は
間ふ。古きを語りて。所謂空舟ハ載られし。姫
君の海濱。著るよと云はるの。これうき乞ひ
る。是其遺風なり。其を此ハ。稚子に諭ふ。脚腰
弱く。懦怯者ハ。誰も皆如此流し棄るゆゑ。これ教

る。ゆゑにうけし。也。次の素尊は御事と云る。文等
に合せて然らむ。○素戔嗚尊。御名義ハ。佐須良
比雄。其意なり。とす。初。檉原ハ顯出。坐て天
下と所治行る。渡海と攝政との。高天原ハ參昇
らし。天上に往反し。三度あり。韓國嶋ハ降
りし。曾尸茂利地。を壓了。安藝に渡りし。安藝
より出雲に遷らし。櫛田姫。命と住。終る。黄泉國
迄。其御女。須勢理毘賣。命と。大被詞。佐須良比比
賣と。稱せしを以て。知し。然るを御誓。段。自。我

勝云而於勝佐備云云。猶其惡態不止而轉とやうに
語ちししハ其生兒勝速日尊と稱ひ御名に託て
あり。是此古辭凡の語くせにして。譬へハ彦火々
出見尊と稱ひ尊蹄ハ稻と稱て穗と出實義なるを
火と出見と申は就て火中より生出るるさま
亦託けし類に次は云と合せて知べし。先註等
に荒い進み給ふ意は御名とししハ談辭の上に
泥るそのみして未考なるに至るなり也。然る惡名を
以て稱る例あるなりし分註ふ神と云速と云るも
皆美賞言也。○勇悍。史記酷吏傳。○安忍。左傳隱公。口

決云。安忍憤也。或人云。美濃國より腹立早きなりと。
今も伊夫理と云と云。○常以哭泣為行。以上ニツハ
幼兒於腹立早く泣かちしと誡る辭也。○天折。吳
志孫登傳。又博雅云。不盡。天年謂之天。說文云。短折也。
○使青山變枯。此ハ神性の勇悍なるを勵く大く談
なり。上古の雅言也。次、文も昇天之時。溟渤以之鼓
盪。山岳為之鳴响とあるなり也。○父母。かそいり
と訓ハし。顯宗紀注。俗呼父為柯曾。あるを。後人
の傍注なり。倭名鈔。父加曾。母伊呂波と云るを。彼
顯宗紀注。依し。母と伊呂波と云くハ。伊呂

兄伊呂妹の類ふて、より分、親しみて云古語より、中
古大江朝綱歌ふよみしを、此の古訓を据てたなり、
○無道アキキト此語萬葉より三代集訖此歌を悉く無益ムヤクニ
のまにまゝると、此紀ふ無状無形無端等此字を訓て、
何事もよりぬ方に用るを、いづれより古語拾
遺ふ無為を訓るハ、文選古詩ふ無為守窮賤輾轉長
苦辛シタとある字にて、本ハ萬葉なるとはよめる意なるを、
猶よりぬ方に用いり、又後拾遺哥によめるも、無
益ムヤクニの意なるを、源氏物語ふよりぬまに用いり、
は皆此紀ふよりぬとあり、委くハ萬葉釋ふ并

へつ、○宇宙淮南子云、四方上下謂之宇、往古來今
謂之宙、○根國黃泉の一名也、黃泉のよりハ、既ふ云
目ふ觸ぬ界なり、故ふ底根之國、極遠之根國、
根之堅洲國、記、根國底之國、詞、下部、萬葉、
云、ちやせ、○遂逐之、此大神の終、黄泉を所治、
也、初より定るなり、此ふかく云、
上より其談、詳の運ひなり、

日本紀問答口、素尊ヲ、惡神トスル、如何、答云、黃
泉ヲ惡ヲ以也、黃泉ヲ惡ハ、人死テ往ト云、カウニ、
惡ム方モアラン、猶然耳ニモ非ズ、古キ
口訣ニ、上古一ノ咒祝也ト云リ、可秘云云、

追加云、黄泉ヲ醜穢ナル者ニ貶斥せしメ、倒語ト云リ、未、其所以ヲ知ズトイヘ、弘仁私記裏書云、上古ノ時、黄泉ヲ甚垢穢凶惡、國ト云、習ハシタルハ、唯死去人ノ魂ノ復モ此世ヘ皈、来ヨカシトノ咒詛也、云云、サレバ倒語シテ、幸福ヲ招、ト云モ同、理也、也、ちやえらう、まにし、う、こそあり、此、尊き大神の御上とも、黄泉のうといへ、惡状イサ云云、云、動レハ談、辭、云、填りなせらる、幽冥の畏さを避んとて、云、かくて此時、先づ日月黄泉の大君定て坐、云、はらり。

○此段の大意ハ、二柱、大神、海山川、及草木等、云、所有云、神等、云、火、神と生、云、人、迄を一限、云、として、女神

と幽冥ふ入、云、然、云、幽冥ふ入、云、故ハ、今ハ云、顯露事云、の神量ハ、既ふ其、及ふ限を盡し、云、是、云、幽冥ハ、云、幽冥云、の精力云、を副、云、天、云、國、云、黄泉の大君とす、大神、云、を、云、顯生、云、として、云、故、云、此時、云、先づ、云、日月黄泉、云、此、云、三界を所治、云、大君と、云、顯出、云、し、云、既、云、此、云、運、云、此、云、以前、云、既、云、素尊の、云、黄泉を所治、云、と云、云、本傳を、云、あ、云、ひ、云、省、云、或、云、幼言談辭、云、如此、云、耳遠く、云、志、云、け、云、傳、云、へ、云、来、云、し、云、あ、云、あり、云、け、云、る。

然、云、志、云、け、云、あ、云、く、云、あ、云、り、云、来、云、し、云、に、云、も、云、又、云、其、云、所、云、由

あるべし。上つ代尊き神の御正所と。そのやうに
 言ふに、けて白くをば、のくくおそれ畏はれ
 ぬと物語ぶりに、そのくれくはつ顔して、幼
 語りと、あそし、にそありあらし、さる故に、直
 ふうち明い、頃ふ聞知らるべき、さうを
 持とくに、遠く引廻らして、云ふ、うく、多う
 るなり。是又神典と窺ふ、一の導べ、さうし。

一書曰。伊弉諾尊曰。吾欲生御宇宙之珍子。
 乃以左手持白銅鏡。則有化出之神。是謂
 大日靈尊。右手持白銅鏡。則有化出之神。

是謂月弓尊。又廻首顧眄之間。則有化神。
 是謂素戔鳴尊。即大日靈尊。及月弓尊。並
 是質性明麗。故使照臨天地。素戔鳴尊。是
 性好殘害。故令下治根國。珍此之間。此云
 摩沙。可利爾。

○御宇宙。纂疏本兼良。公。作御宇宙。富宇同。○珍子。珍
 玉篇云。貴也。美也。重也。祝詞云。宇豆乃幣帛萬葉六也。
 宇豆御手とあり。堆と云と同意也。○白銅鏡。續博

物志云古无純銅作鏡者皆以錫雜之景同李時珍云
白銅出雲南以爐甘石鍊為黃銅其色如金砒鍊為白
銅雜錫為響銅又云錫銅相和得水澆之極硬故鑄鏡
用之稱德紀云以真白鐵所鑄之鏡とあり白鐵ハ錫
乃一名也此も是等も据て書るにて末々も也皇朝
往古銅鏡と云る物ハ所謂金銅ふして一種銅也和
たる物ふ此は麻曾美と訓ハ真清也意加賀美ハ赫
見の義也○廻道阮籍談○顧眄之間前漢書班固叙
傳言見間疎まう記ふ洗左御目時所成神名天照大
御神次洗右御目時所成神名月讀命とあり是に合

すに鏡とゆふ目とゆふ共ふ光る物以て日月ふ
比しう又上ふ引天鏡尊以御鏡とて此御時御
頸玉と具して天照大御神ふ所賜申互に我寶鏡と
を詔るの然る名るといふ古事記の談事にして此
紀ハ正傳也更に按ふ此紀の方よりさへし○明麗
張衡賦○照臨周書若日月之照臨又左傳○性好殘
害此等のより上文に云つ但黄泉の界より溢る来る
物に障礙を比して云はる有へし何よりてもか
忘るる言種を神の御上に勿係て足る程次に
云くやうとも考へ合はるし

一書曰ツキヒノカミヲウミタヒテ日月既生次生ニ蛭兒ヲ此兒年滿三ミトセニ十シ九ク歲脚尚不立ガリキ初伊弉諾伊奘冉尊ミコトノ巡柱之メシ時陰神先發喜言ツアケテヨゴトヲ既違陰陽之理ヘリメヲノ所以今リニコノユエニイ生ニ蛭兒ヲ次生ニ素戔嗚尊ヲ以神性惡常好哭コノカミサガナクシテワサトナキツクミ志ニ國ニ民多死ニ青山ハカラヤモオシメ為枯其父母ニ勅曰ニ假使モ汝治ニ此國ヲ必多所殘傷オホカラシコナフコト故汝可以馭極遠ハシムベシトノリモヒキトホツ之根ニ國ヲ次生ニ鳥ニ磐石ニ櫛ニ船ヲ輒ニ以此ニ船ヲ載ニ蛭ニ

兒ヲ順ニ流ニ放ニ棄ニ次生ニ火ニ神ヲ輒ニ遇ニ突ニ智ニ時トキニ伊弉冉尊ニ為ニ輒ニ遇ニ突ニ智ニ所コカエ焦テ而終ニ矣ニ其且終之ヤミコヤシマ間セルトキニ卧ニ生ニ土ニ神ヲ埴ハニ山ニ姬ニ及ニ水ニ神ヲ罔象ミツハノ女ニ即ニ輒ニ遇ニ突ニ智ニ娶ニ埴ニ山ニ姬ニ生ニ稚ワカ産ニ靈ニ此ニ神ヲ頭カシラニ上ニ生ニ

〇日月既生日月神と省る也。〇生蛭兒上段の如し。〇違陰陽之理所以云云此云蛭兒と素戔嗚尊と一ツ云云をさす。つゝ紅語まかり。是と想へば蛭兒

のりし。始より皆談辞ありし。○志裏ふ心志と會
て。頬とふくくは也。會頬喋の約れりふやあらず。
○生鳥磐櫂樟船。此より不審也。次文に。輒以此船
載蛭兒順風放棄とあるに依り。船なれど有情の御
胎より。非情此船を産みよへきにあらず。此ハ古事
記。此段より。次生神名鳥之石楠船神。亦名謂天鳥船と
あれハ。神なり。故按ふ。此時女神火産と生坐て所焦
れよに就て。水神土神。神。神。神。御食神等。顯出
坐る。皆火を禦き。飢を助る神。このみ也。然れハ今
此櫂樟船。神も。女神の幽冥に入坐。資に生れんし

かろると。此一書ふハ。心ましく蛭兒の方に。語を乱へ
るなり。かくて鳥ハ。行り。此速意。磐ハ。堅固なる稱言。
櫂樟ハ。下。一書ふ。杉及櫂樟。此兩樹者。可。以為。浮寶。又
播磨國風土記云。仁徳天皇。朝。以。楠。作。舟。其。飛。如。鳥。故
速鳥名とあれハ。此木を船と作る。ハ。勿論なれど。
此ハ。猶彼。熊野櫂樟。日命。を。く。れ。御名。の。例。の。如。く。久
須ハ。幽冥。二字に當る古語なり。故云。云。云。云。也。
恒ふ。奇ハ。しく。奇しく。奇魂。奇齋事。云。奇も。本を
皆幽冥の靈異なる方より云也。源氏物語。久須
く。法。げ。づ。き。と。ほ。け。け。け。も。幽。冥。り。う。しく。佛。法。真

しと云はとれ意也。今世の言ふ、闇き谷と、久須谷と
云。又物の色は黒むらむらと、久須太色と云。ちと
皆同し。凡、此等に合せて、三紀の此段の本傳の意と
曉るべし。薬も、幽冥の術なる故ふ云。○軒遇突智御
名、義、赫津智にて、火のつらやくと以て稱は也。津ハ、天
津國津の津。智ハ、例の美稱也。神名帳ふ、紀伊國名草
郡、香都智神社。○所焦而終矣。此神も上の例に如く直
ふ火と云ふハ、沸れ、火産と云。天下は火を掌る神
なり。これに、焦れぬと云ふは、有しも去らぬ
とれど、其故ふ神避ぬしむけあり。火神と顯出

ぬ。遠と一、張るるして、幽冥に入坐る。上ふ云、う如
し。○埴山。説文徐廣云、埴、黏土也。波、迹と、夜迹と通は
黏は、意也。神名帳ふ、淡路國美馬郡、波爾移麻比弥
神社。○罔象。孔子家語云、水之怪、曰龍罔象、白澤圖云、
水之精、名罔象。神武紀訓註、罔象、女也。此云、游菟破廻迷、
援之訓へし。御名、義、神功紀ふ、水葉稚也。とあるに依
ふ。水と美都波とも云ふ。即水女の意なり。祝
詞ふ、藻と藻葉と云ふ。神名帳ふ、淡路國美馬郡、弥都
波能賣神社。○軒遇突智、娶埴山姫。此文を以て、火
ふ坐るる、炳しきに、世ふ此神と、直ふ火と心得て

神社、今の京、西の三代實録廿二廿四出帳ふハ大、
字を脱ヒラせり。○所コガ焦エ而テ神カムサリ退ヒキ矣キ。火ヒ神カミと称ナひふ就ツての談
辞也。凡て幽冥出現、神カム崩ムサセと云イハふてなりし。只レ隱カクレ身ミ於
ふると。如此カクハ云イハなり。されハ神カムサリ退ヒキ神カムサリ避サふとの書
て、崩と書るるをなり。鎮火祭、祝詞ふ、火結ホムスビ神カミ生ナ給タ氏
美保止ミホト被アハ燒エ氏テイ石イハ隱カクレ坐マ氏シとあるを、祝詞ハ、人々示シ以
物モノふありね。凡て何ナニも此上ココノカミ也。古傳説コトワザふ、語コトを傳ツへ
たる幼言コトワザの随マふ奏キコエ上ウて、神カミふるるを奉ホウる例コトワザなる故
也。猶ナホ此ココも、次ツギ々ツギいハく度タビも弁ワカふへし。彼カノ阿ア多タ古コと云イハふ
仇アタゴ子の意イにて、談辞タンジと以モて云イハふるる俗語ソコトワザあり。

○天ヨサ、吉ツラ葛ツラ。是も吉葛ツラ、神カミなる也。例の首カミる也。御名ミナ、義ヨシ、天
ハ、幽冥ヨミの意イ。吉葛ツラハ、彌イ真マ葛ツラにて、匏ヒヤク瓜カと称ナへて、御名ミナふ
負オシひゆるハ、荒火アラヒと防マぎ、孫ムスふと以モてあり。彼カノ鎮火祭チンカサヒ、
祝詞イハヒ云イハふ、畧リョク上ウ、更ニウ生ミ子シ水ミヅ、神カミ匏ヒヤク、川カハ菜ナ、埴ヒヤク山ヤマ姬メ、四シ種シユ、物モノ乎カ生ナ給タ
氏ウヂ此ココ能ノ心ココロ惡アク子シ乃ノ心ココロ荒アラ比ヒ曾ソ波ハ水ミヅ、神カミ匏ヒヤク埴ヒヤク山ヤマ姬メ、川カハ菜ナ乎カ
持テ氏ウヂ鎮チン奉ホウ礼レイ止ト事シ教カウ悟ワ給タ支シとあり。是コトにて、瓠ヒヤク杓シヤク等トし
く、斟シム水ミヅ器キの名ナに負オシ来キゆるあり。神名帳ミナナカふ、紀伊キイ國クニ名
草クサ郡クニ火ヒ静シヅメ神社シヤ、右ミダ四シ神カミと
野ノ祭サヒなり。

一書曰、伊弉冉尊、且生火、神軻遇突智之

此を金生場彦にて金と生して土と掘水を酌
より飲えし。神名帳河内國大縣郡金山孫神社ま
金山比女神社ま美濃國不破郡仲山金山彦神
社名神大今此南宮也。此外金山亦多く此神を祭る
とも思ふ。今俗に金は色は變したると吐唾等
の汁に漬て直にうのあると此の故
事に因て驗あり。○小便下訓注尾此云愈磨理倭名抄
尿由ハ波由ハ湯由ハと同義歟。波利ハ屎クニと同く為出ると
云遺尿馬尿ハ馬尿なり。磨之婆との通音。○屎屑と
同義也。音の上下を以て分る。此等何事も荒
火と鎮め給ふ神なり。此は語りよせしむるなり。

て此傳へし。神退給ふし。みそあはるなり。

一書曰伊弉冉尊生火神時被灼而神退
去矣。故葬於紀伊國熊野之有馬村焉。土
俗祭此神之魂者。花時亦以花祭。又用鼓
吹幡旗歌舞而祭矣。

○神退去矣。此大神崩御給ふ。伊弉諾尊也。崩御給

ふべきものなるに。登^リ天坐^キとあるやうに。女神も隠^レ身^ニ。幽冥^ニ入^リ坐^シし。既^ル云^フが如^シ。これハ此^ノ葬^トと云^フ。記^ス。葬^ト出^テ雲^ノ國^ト。與^リ伯^ノ耆^ノ國^ト之^ノ堺^ト。比^レ婆^ノ之^ノ山^トとある。なと^リ。神^カ退^サ去^リと云^フに就^ス。談^ク辭^ヲをう^シ。共^ニ以^テ隱^レ身^ニ。終^ヒしと。齋^ヒ祭^ルと云^フ。熊^ノ野^トと云^フ。隱^レ去^ルの意^ト。比^レ婆^ノと云^フ。潛^レ坐^ルの意^ト。出^テ雲^ノ熊^ノ野^ノ宮^ト。日^ノ隅^ノ宮^ト。同^ニ義^ナなり。以^テ著^シ明^シ。○有^リ馬^ノ村^ト。紀^ノ伊^ノ國^ノ牟^ノ婁^ノ郡^ト。尔^レ在^リ那^ノ智^ノ三^ノ卷^ノ書^ト云^フ。有^リ馬^ノ村^ト。有^リ産^ノ田^ノ宮^ト。命^ヲ阿^ノ過^ノ突^ノ智^ノ神^ト。乃^チ伊^ノ特^ノ冉^ノ尊^ト。神^カ退^サ之^ル地^ト。而^{シテ}其^ノ東^ノ有^リ隱^ノ窟^ト。亦^チ曰^ク産^ノ立^ノ窟^ト。尔^レ曰^ク花^ノ窟^ト。窟^ト名^ト見^レ増^レ基^カ熊^ノ野^ノ紀^ノ行^ト。所^レ葬^ル伊^ノ特^ノ冉^ノ尊^ト。岩^ノ窟^ト也^ト。去^リ宮^ヲ三^ノ里^ト許^ニ海^ノ濱^ト。每^ク歲^ニ突^ク出^ル。大^ノ岩^ノ壁^ト也^ト。

暮^ク春^ニ以^テ繩^ヲ作^リ花^ノ及^チ幡^ノ旗^ト。今^ハ擡^テ神^ノ葉^ヲ爲^シ花^ノ勝^ト。圍^リ繞^ル於^テ窟^ノ歌^ト舞^ト。祭^ル之^ノ。盖^{シテ}往^リ古^ノ遺^レ俗^ト也^トとあり。此^ノ書^ノ所^レ葬^ルと云^フ。紀^ノ記^ス。尔^レ依^テ誤^ルるなれど。有^リ隱^ノ窟^トと名^ト傳^ヘへるなり。と記^ス。也^ト。久^ク安^ノ百^ノ首^ノ。夫^レ木^ノ集^ノ等^ニ。此^ノ花^ノ窟^トをい^ハる。哥^トあれど。今^ハ引^キ延^ベもあ^リ。又^チ此^ノ有^リ馬^トと云^フ。在^リ祭^ルの義^トに。彼^レ隱^レ身^ヲ。終^ヒし神^ノ代^トなり。在^リ々^ニ而^{シテ}祭^ル来^ル地^ト。乃^チよ^クなり。○土^ノ俗^ト。此^ノ二^ノ字^トを比^レ登^トとのみ訓^シ。嗟^ク峨^ク天^ノ皇^ト。御^ノ諱^ト。邦^ノ仁^ヲを避^ケてなり。當^レ時^ノの漢^ノ様^ト也^ト。○花^ノ時^ト亦^チ此^ト。亦^チ字^ヲ就^テ按^ル。花^ノ時^ト以^テ花^ノ祭^ル。亦^チ黄^ノ葉^ノ時^ト以^テ黄^ノ葉^ノ祭^ルとありしと。寫^シ脱^ス。にや。或^レ人^ノ云^フ。舊^クハ二^ノ月^ノ二^ノ日^トと。九

月二日きりしと。近世ハ十二月二日に改りしと云了。○鼓吹幡旗。若古傳なりハ。鼓の有しし思ふへし。

一書曰。伊奘諾尊。與伊弉冉尊。共生大八

洲國。然後伊弉諾尊。曰我所生之國。唯有

朝霧。而薰滿之哉。乃吹撥之。氣化為神。號

曰級長戸邊命。亦曰級長津彦命。是風神

也。又飢時生兒。號倉稻魂命。又生海神等。

號少童命。山神等。號山祇水門神等。號速

秋津日命。木神等。號句々廻馳土神。號埴

安神。然後悉生萬物焉。至於火神。軒遇突

智之生也。其母伊奘冉尊。見焦而化去。于

時伊弉諾尊。恨之曰。唯以一兒替我愛之。

妹者乎。則匍匐頭邊。匍匐脚邊。而哭泣流

涕焉。其淚墮而為神。是即畝丘樹下所居

靄氣の深うつろつろ如^カ此る^カ後^カあり^カも有^ルち^カり
ろり今も北越奥羽の間ハ靄氣深し松前蝦夷地も
至ても青天と名^ルる^カも罕也と云^フ其^レも准へて古へ
を想^ハひ^カや^ルへ^シ○吹撥之氣化為神^ル此ハ息氣と風
とを取合せ^ル談^ハ辞也此風神も多^ク海山神の顯^ア
生^レみ^ル状^ル顯^ア出^ルみ^ルと朝霧云云と云^フ如^カ
此ハ語^リる^カも^カ○號曰級長戸邊命云云此^カ
本^ト曰^ス級長津彦命級長戸邊命とあり^シと謬^レる也
亦名^ヲも非^ズ男神と女神と二柱也御名義ハ風津
日子風戸邊にて日子戸邊ハ上^ル大^ニ苦^ク彦大^ニ苦^ク邊^ニ

例の如し風と志と云ハ荒風飄風風吹風氣^ト同^ト通^ス
伊奈佐又知^ル轉^レて東^ニち^ク云^フ是也又御息^ノと^リ
風急風又轉^レて速^ク風^ト云^フ是也又御息^ノと^リ
かけ^ル磯^ノ鷗^ト息長鳥と云て萬葉に安房に冠
らせ^ル鳥^ト水底^ニ入^リて浮^リ出^テ阿^ノ々^トと息^ノ長^ク
意又息^ノ長^ク川^ノ連^ケる^カ水中^ニ居^ル間^ノ息^ノ長^ク
し也神名帳ハ近江國坂田郡同^ノ所^ニ日^ノ撫^ノ神社伊^ノ夫^ノ伎^ノ
神社並^ニ坐^リ此^ノ日^ノ撫^ノ志^ノ那^ノ都^ノの轉^レ也又科^ノ戸^ノ之^ノ風^ト
云も級^ノ長^ク戸^ノ邊^ノの風と云意^ハち^ク此^ノ二^ノ神^ノ帳^ハ大^ニ
和國平群郡龍田坐^リ天^ノ御^ノ柱^ノ國^ノ御^ノ柱^ノ神社二^ノ座^ニ並^ニ名^ヲ神^ノ
新^ニ又^ニ龍^ノ田^ノ比^ノ古^ノ龍^ノ田^ノ比^ノ女^ノ神社二^ノ座^ニ此^ノハ荒^ノ
嘗^ニ魂^ノ歟^ト天^ノ武^ノ紀^ニ云

祠風神于龍田立野龍田東南麓今伊勢内宮別宮也
風日祈宮今風宮昔ハ社号タリシカ正應六年依異
賊降伏宮号宣下アリ。○倉稻魂命御名義宇賀宇計
音通ヒテ食靈ト云クカ如シ。即大殿祭祝詞ハ屋船
豊宇氣姫命注云是稻靈也俗詞宇賀能美多麻ト有
次文を按ル食保神ト同神也倭姫命世記云泊瀬朝
倉宮大泊瀬稚武天皇即位廿一年丁巳冬十月一日
倭姫命夢教覺給久皇大神吾一所耳不座波御饌毛
安不聞食氏丹波國與佐之小見比沼之魚井原坐道
主子八乎止女乃齋奉御饌都神止由氣大神乎我坐

國欲止トコトオモラ海覺給ウミサトレクヒキ支云云明年戊秋七月以大佐命天
從丹波國余佐郡真井原志奉迎止由氣皇大神度會
山田原乃下都磐根尔大宮柱廣敷立豆高天原仁千
木高知豆鎮坐止稱辞定奉利神名帳丹後國丹波郡
比沼麻奈為神社元々集云丹後風土記曰比沼山頂
伊勢國度會郡度會宮四座相殿坐神三座山城國紀
伊郡稻荷神社三座並名神大下素素戔嗚尊兒
尔稻倉魂神ウカウカタニ舊事本紀ウカウカノ稻倉女神ト名也
或說云魂ミタマト云クニ義以ウウカノ神靈義ト恩賴義トウカノ
素戔嗚尊兒ウカノ稻倉魂ハ恩賴義ルウカノ稻穀ル功坐神

にして、此とハ別也と云ふ。神名帳、大和、國廣瀨、郡廣瀨坐和賀、宇加乃賣命、神社。次、新嘗、大月、大忌祭、祝詞云、御膳持、須留若宇加能賣命、登御名者、白底云云。續紀、寶龜九年六月、奉幣帛於廣瀨龍田、二社、為風雨調和秋稼、豊稔也。○海神、海の一名と、和多と云ハ、渡了物と云ふ。少童、御名、義海津持の、子既云云。文字ハ、博物志、西海、神童、張華詩有海童、邀路注云、海神、名とある。と取れ、なれど、無恭字也。○山祇、山津持也。○水門、水之門也。潮水も、水に、あれど、打るうせ、を、真水

と云て、古くハ大河の海、入處と云ふ。門ハ、島門、川門の門、ふて、其、入口より、通る筋と云。○速秋津日命、記、速秋津日子、速秋津日女、二神あり。此ハ、下、一書、赤土、命とある。赤と音通ハ、速明齋の義なり。ハ、大被、詞、合せて、云ふ。○句々、廻馳、既出。○埴安、是上、出、埴安と云地、名ハ、此神、在所、なれハ、名となれ、る也。帳、大和、國十市、郡、畝尾、坐、健土安神社。大月次、とある。香山、林麓也。神武紀、有、潜取、天香山之埴土、云云。故号、取土之處、曰埴安、と云。却了末也。○唯以、一兒替乎云云。此ハ、記、謂、易子之一木乎、とある。に依

と訓へし。延喜私記より以来、コノヒトツケとよみ
しれど、此處ハ、軒遇突智と甚く悪て、愛吾妹命と悪
兒一疋許ふ、易ほる哉とて、獸ふ比へ賤て、詔ふ詞な
るれハ、一木の二字を、比登都伎とよませたる也。
木の用ふ、御木と書て、美足と、伎と訓、こやを、雄畧紀、
開と訓とを同じうし、歌ふ、馬八匹と、宇摩能耶都擬播とよみは、うたし、
中古、歌ふも、馬に幾伎とよみ、これうまを、猶此
こやを、言別、又難語考、等にも云、ほれば、其よ由
けり、は、○匍匐頭邊云、女神ハ、隱身、みづなれ
と、崩坐とよび、は、かゝる談辭のそく、かゝく、又

情あむ、薄う、故ふ、談ふりに云る也、そを凡て上
代の人ハ、神代七代に間ふ、未死なまると、あまねく
知つる、故ふ、妨けあはしかり也。○畝丘、此、上ふ
香山、二字を脱せり也。上は埴安、神の在所也。○樹、本
神名帳、畝尾都多本神社と有て、今七木、本村、あれ
ば、畝尾も、木下也。地名也。若木、下を、都多本と云、し
るや、姓氏録、畝尾、連ある也。此處より出し、人なる
ん。○泣澤女、御名、義、泣真雨、は、八千矛神、御
歌、汝が泣きよ、阿佐阿米能佐疑理、迹多、牟叙
とあるに、合せて、志らる、此、社、萬葉二、六、葉、ふけよみ

これ今慥なるは。○斬河邊突智三段段と。伎太
と訓ハ。倭名抄尔筑前國鞍手郡新分岐多ニヒキタ又豊後國
大分郡も於本岐多オホキタと音便ふもみも也。とて
斬と云ふハ是も上文と等しに談辭也。若實に斬殺
し終つて天下の火絶て民の竈も断つべきものぞや
此ハ其火徳の餘り猛烈ハゲシなり故ハ幽冥に鎮めさ
せ終るしとかくを切つたりたるあり

幽冥に鎮め終るしと云ふ火の萬物も含みて其物を
焼くとしせば恒久は物内潜カウ居て鑽キリ採モ
ぎぬハ顯れ出づるたゞいと云此外現世に在
なづ其本實ハ幽冥なるか多うなりたゞ今

此地水火風空の五つの中ハ全顯明物を地のみ也
水火の二つを幽と顯とを相兼つて風空の二つ
は幽冥なる故ハ人々目にはハ穴をさる也。かこれハ
此御時よく荒火を鎮め和し終るは烈く物を
焼くありハ飛ヒありハ走ハる人の御きにある
ハざらありを今見る如くにありたるハ大神の
御賜物なるぞうし。

○天安河云此下ハ經津主之祖神の名を脱し
其下一書ハ祖とせる磐筒男磐筒女神ハ出されど
下に別ワカチて記せる名れば此傳へハ其とハ同じか
る也。いと可アタラ惜し故今舊事紀ハ据て考るに此を

劔ハヨリニタ又垂血是ハタニリコ激コ越天安河邊ベ所在ナ五百箇磐石ウイハムラ為神ト號ミナ
曰天尾羽張神亦曰稜威即此經津主神之祖矣ミヤナリと有
しを落して後ふ文と少し改りたるふそあるん但
又是とも別傳へなりしふやもて此軻遇突智神と産
路ひしも此國ふてのり又斬路ふと云るも皆此國
ふてのりなるを此天安河邊といひ又其神等と
坐ス天安河上ニと云るを以ても恒ア天上メと指サる
はる幽冥と云るを覺サる又此處ふして如カ
此生路の經津主神甕槌神と下コトムケの和平段ふて
と天降アラと云る是又天降アモリと稱ヘ辭ヒと悟サるべき證文

の如し○五百箇磐石此ふ書る字の如く其大數五
百箇と數々の石群と云是を由都ユツとよむへ記本紀
等に湯津石村湯津桂湯津爪ツマ櫛シとあるを以て也
伊保イホの約ヨ用ヨなれども用ヨと由ユとハ近く通ふ故ふ
由都ユツと云なれり自らヨリ由利ユリ共云う如し○經津主
神御名義ハ師フツ主ヌシ師フツ靈ミコト神劔ツルギと主掌ウシハキ路ミチふり稱
へり○ツツ和名抄云唐韻劔鼻也ウチ和名都美波ツミハと有
名義ハ留トメ又バのまをへしウチ較手ウチ加カけり刀又と受留
ん為此物なれハ也今都婆ツバと云ハ省ハる也○甕速日
甕ハ借字にて嚴重甚大のま也美加伊ミカ加イ音通へり

嚴矛^{イセボ} 紀^{イカシ} 舒明^{イカシ} 重日^{イカシ} 皇極^{イカシ} 紀^{イカシ} 此^{イカシ} 云^{イカシ} 伊賀^{イカシ} 之^{イカシ} 御世^{イカシ} 祝^{イカシ} 武甕槌^{イカシ} 命^{イカシ}
と、遷^{ナラフ} 却^{ナラフ} 出^{ナラフ} 宗^{ナラフ} 神^{ナラフ} 祝^{ナラフ} 詞^{ナラフ} 亦^{ナラフ} 健^{ナラフ} 雷^{ナラフ} 命^{ナラフ} 三代實錄十一^{ナラフ} 葉^{ナラフ} 大和^{ナラフ}
國^{ナラフ} 武^{ナラフ} 雷^{ナラフ} 神^{ナラフ} 有^{ナラフ} 又^{ナラフ} 甕^{ナラフ} 星^{ナラフ} 也^{ナラフ} 嚴^{ナラフ} 星^{ナラフ} 也^{ナラフ} 甕^{ナラフ} 粟^{ナラフ} 也^{ナラフ} 嚴^{ナラフ} 粟^{ナラフ} 也^{ナラフ}
る^{ナラフ} う^{ナラフ} し^{ナラフ} 速^{ナラフ} 日^{ナラフ} ハ^{ナラフ} け^{ナラフ} や^{ナラフ} ぶ^{ナラフ} る^{ナラフ} ち^{ナラフ} ゝ^{ナラフ} 〇^{ナラフ} 燐^{ナラフ} 玉^{ナラフ} 篇^{ナラフ} 火^{ナラフ} 盛^{ナラフ}
乾^{ナラフ} 也^{ナラフ} と^{ナラフ} あ^{ナラフ} れ^{ナラフ} ハ^{ナラフ} 乾^{ナラフ} ち^{ナラフ} ゝ^{ナラフ} 火^{ナラフ} に^{ナラフ} 非^{ナラフ} 以^{ナラフ} 下^{ナラフ} の^{ナラフ} 分^{ナラフ} 註^{ナラフ} 亦^{ナラフ} 誤^{ナラフ} れ^{ナラフ} る^{ナラフ}
處^{ナラフ} あ^{ナラフ} る^{ナラフ} 〇^{ナラフ} 武甕槌^{ナラフ} 神^{ナラフ} 御^{ナラフ} 名^{ナラフ} 義^{ナラフ} 武^{ナラフ} ハ^{ナラフ} 稱^{ナラフ} 言^{ナラフ} 甕^{ナラフ} 槌^{ナラフ} ハ^{ナラフ} 嚴^{ナラフ} 針^{ナラフ}
に^{ナラフ} て^{ナラフ} 是^{ナラフ} も^{ナラフ} 師^{ナラフ} 靈^{ナラフ} 神^{ナラフ} 劍^{ナラフ} と^{ナラフ} 主^{ナラフ} 領^{ナラフ} 孫^{ナラフ} 也^{ナラフ} と^{ナラフ} 以^{ナラフ} て^{ナラフ} 稱^{ナラフ} へ^{ナラフ} ち^{ナラフ} ゝ^{ナラフ} 也^{ナラフ}
猶^{ナラフ} 上^{ナラフ} の^{ナラフ} 經^{ナラフ} 津^{ナラフ} 主^{ナラフ} 神^{ナラフ} と^{ナラフ} 合^{ナラフ} せ^{ナラフ} て^{ナラフ} 此^{ナラフ} 二^{ナラフ} 神^{ナラフ} の^{ナラフ} う^{ナラフ} へ^{ナラフ} 下^{ナラフ} 卷^{ナラフ} に^{ナラフ} 委^{ナラフ}
く^{ナラフ} 云^{ナラフ} へ^{ナラフ} し^{ナラフ} 〇^{ナラフ} 磐^{ナラフ} 裂^{ナラフ} 神^{ナラフ} 根^{ナラフ} 裂^{ナラフ} 神^{ナラフ} 御^{ナラフ} 名^{ナラフ} 義^{ナラフ} ハ^{ナラフ} 磐^{ナラフ} 根^{ナラフ} と^{ナラフ} 斬^{ナラフ} 割^{ナラフ} に^{ナラフ}
て^{ナラフ} 是^{ナラフ} も^{ナラフ} 劍^{ナラフ} 小^{ナラフ} 因^{ナラフ} 孫^{ナラフ} 人^{ナラフ} 也^{ナラフ} 下^{ナラフ} 卷^{ナラフ} 始^{ナラフ} の^{ナラフ} 本^{ナラフ} に^{ナラフ} 岩^{ナラフ} 裂^{ナラフ} 根^{ナラフ} 裂^{ナラフ} 神^{ナラフ} と^{ナラフ}

ある^{ナラフ} 也^{ナラフ} 一^{ナラフ} 神^{ナラフ} と^{ナラフ} 傳^{ナラフ} へ^{ナラフ} ち^{ナラフ} ゝ^{ナラフ} 也^{ナラフ} 〇^{ナラフ} 燐^{ナラフ} 玉^{ナラフ} 篇^{ナラフ} 火^{ナラフ} 盛^{ナラフ}
て^{ナラフ} 按^{ナラフ} せ^{ナラフ} ら^{ナラフ} ぬ^{ナラフ} 〇^{ナラフ} 燐^{ナラフ} 玉^{ナラフ} 篇^{ナラフ} 火^{ナラフ} 盛^{ナラフ}
筒^{ナラフ} 男^{ナラフ} 命^{ナラフ} 御^{ナラフ} 名^{ナラフ} 義^{ナラフ} 石^{ナラフ} 槌^{ナラフ} 也^{ナラフ} 是^{ナラフ} も^{ナラフ} 劍^{ナラフ} 小^{ナラフ} 因^{ナラフ} 孫^{ナラフ} 人^{ナラフ} 也^{ナラフ} 上^{ナラフ}
代^{ナラフ} 劍^{ナラフ} を^{ナラフ} 針^{ナラフ} 小^{ナラフ} 因^{ナラフ} 孫^{ナラフ} 人^{ナラフ} 也^{ナラフ} 今^{ナラフ} も^{ナラフ} 備^{ナラフ} 前^{ナラフ} 鍛^{ナラフ} 冶^{ナラフ} 也^{ナラフ}
然^{ナラフ} る^{ナラフ} 也^{ナラフ} 〇^{ナラフ} 燐^{ナラフ} 玉^{ナラフ} 篇^{ナラフ} 火^{ナラフ} 盛^{ナラフ}
塩^{ナラフ} 筒^{ナラフ} 老^{ナラフ} 翁^{ナラフ} と^{ナラフ} 書^{ナラフ} け^{ナラフ} ゝ^{ナラフ} 也^{ナラフ} 此^{ナラフ} 神^{ナラフ} を^{ナラフ} 下^{ナラフ} 一^{ナラフ} 書^{ナラフ} に^{ナラフ} 根^{ナラフ} 裂^{ナラフ} 神^{ナラフ} 子^{ナラフ}
と^{ナラフ} せ^{ナラフ} 〇^{ナラフ} 燐^{ナラフ} 玉^{ナラフ} 篇^{ナラフ} 火^{ナラフ} 盛^{ナラフ}
刀^{ナラフ} 上^{ナラフ} 也^{ナラフ} 〇^{ナラフ} 燐^{ナラフ} 玉^{ナラフ} 篇^{ナラフ} 火^{ナラフ} 盛^{ナラフ}
其^{ナラフ} 刀^{ナラフ} 上^{ナラフ} 也^{ナラフ} 〇^{ナラフ} 燐^{ナラフ} 玉^{ナラフ} 篇^{ナラフ} 火^{ナラフ} 盛^{ナラフ}
の^{ナラフ} 云^{ナラフ} ち^{ナラフ} ゝ^{ナラフ} 神^{ナラフ} 武^{ナラフ} 紀^{ナラフ} 小^{ナラフ} 因^{ナラフ} 孫^{ナラフ} 人^{ナラフ} 也^{ナラフ} 撫^{ナラフ} 劍^{ナラフ} 此^{ナラフ} 云^{ナラフ} 〇^{ナラフ} 燐^{ナラフ} 玉^{ナラフ} 篇^{ナラフ} 火^{ナラフ} 盛^{ナラフ}
〇^{ナラフ} 燐^{ナラフ} 玉^{ナラフ} 篇^{ナラフ} 火^{ナラフ} 盛^{ナラフ}

辞魔屨記云、手上萬葉九、燒大刀乃手類、此紀古訓、劍柄此等ハ音の轉じたる也。○閻龍閻ハ谷也、大被詞、佐久那太理尔落多支都云云とある、谷川の水は、落来るとまいて、久那ハ即久良に通ひて、佐ハ發語なり、萬葉十七ハ、鷺能奈久久良多尔々、是も久奈多利と通へり、諸國ハ、其倉と云地多うり、皆谷を開きたる地也、人の鶯も、身軀の谷也、雷龍ハ、龍蛇の玉たる、そのなり、豊後風土記、球珠郡、下、蛇龍、謂於美萬葉二ハ、吾岡之於可美尔言而令落為雪之摧之彼所尔塵家武とよむ、如く、恒尔電なと零する神也、此ハ其雷龍

等と掌^{ツカサド}に以^ツて神と申^スはるる、神名帳河内國茨田郡、意賀美神社、和泉國日根郡、意賀美神社、尾張國海部郡、憶感神社、此外下卷、廿五右、六十二、左、七十六、左、^{オカミ}も多くと、^ミゆ、○閻罔象、罔象の^ミ既^ミ出^ス、此ハ谷川の水神也、神名帳阿波國美馬郡、弥都波能賣神社、陸奥國三方郡、閻見神社、閻水と閻水と讀、^ミ誤^スれるなり、○此段ハ大意ハ、二柱、大神共ハ大八洲國と、作^スるに、^ミ恒^ミに、^ミ朝霧^ミの如^ク潮氣^ミのみ、^{カヨ}調^スるなり、と、歎^スうせ給^ス、故^レ其^レ雷氣^ミと吹^ス撥^スち、^ミ風^ミ神^ミ級^ミ長^ミ津^ミ彦^ミ命^ミ、^ミ級^ミ戸^ミ邊^ミ

命顯出坐ぬ。又既尔國成て其國民の飢ふる料と稻倉魂命顯出させ。又海山の神木草神土神等と顯せりて財用を足しめ。又萬物神を顯せりて世中を幸ハへ給へり。かくて火神を顯し給ひし時、此火徳を以て日神を顯し奉んとて女神ハ幽冥に御身を隠し給ひしにこそ。

猶ハ幽冥より出て現世を照らす如く。幽冥より幽事以て日月神を顯し給ひし運び也。此火と日とを以て也。女神の火神を顯し坐す一限とて幽冥に隱し給ひて。次ハ日神乃出現させ給へり。深しとも幽き所由のあり。

又、いんしらぬ靈異あり。なれど、いんしらぬに未見過し。これ、昔より識量に深き人なりて、いんしらぬに信ぜり。能くいんしらぬ。あして悟るるをや。

爰に火産靈神ハ火勢あまなり烈しうり。これ、伊弉諾尊驚らせ給ひ。揮劍して其猛火と幽冥に鎮め給ひぬ。その時、其火くわくわくと分散して。九柱神顯出給ひ。其神たち多く御劍を回給ひて。武々勵くまゝ。まれば。偏ハ火徳をさす所をとなり。

然後伊弉諾尊追伊弉冉尊入於黄泉而

及之共語時伊奘冉尊曰吾夫君尊何來
之晚也吾已食泉之竈矣雖然吾當寢息
請勿視之伊奘諾尊不聽陰取湯津爪櫛
牽折其雄柱以為乘炬而見之者則膿沸
虫流時伊奘諾尊大驚之曰吾不意到於
不須也凶目汗穢之國矣乃急走迴歸于
時伊奘冉尊恨曰何不用要言令吾恥辱

乃遣泉津醜女八人狹女泉津追留之故
伊奘諾尊拔劍背揮以逃矣因投黑影曼此
即化成蒲陶醜女見而採噉之噉了則更
追伊奘諾尊又投湯津爪櫛此即化成筍
醜女亦以拔噉之噉了則更追後則伊奘
冉尊亦自来追今世人夜忌一片之火又
夜忌擲櫛此其緣也是時伊奘諾尊已到

泉津平坂一云伊奘諾尊乃向大樹放屍
此即化成巨川泉津日狹女將渡其水之
間伊奘諾尊已至泉津平坂故便以千人
所引磐石塞其坂路與伊奘冉尊相向而
立遂建絕妻之誓時伊奘冉尊曰愛也吾
夫君言如此者吾當縊殺汝所治國民日
將千頭伊奘諾尊乃報之曰愛也吾妹言

如此者吾則當產日將千五百頭因曰自
此莫過即投其杖是謂岐神也又投其帶
是謂長道磐神又投其衣是謂煩神又投
其禪是謂開鬻神又投其履是謂千敷神
其於泉津平坂所塞磐石是謂泉門塞大
神亦名道及大神矣或所謂泉津平坂者
不復別有處所但臨死氣絕之後是之謂

○伊奘諾尊追云云。入於黃泉。而此ハ女神の隠御身ヲ
て見之に成之。と覓て。幽冥入之。とハ。如
此ハ語了もせり也。次一書。又舊事紀等に。殞斂之處
と傳へたるも。人代作行。准へて。云辭也。○共語
時。此語ハ。女言等也。專此現世。凡情。移し。傳へ
し。ハ。其心して。欠へき。や。ぞ。○夫君言ハ。汝兄に
て。汝命。汝皇子等ノ類也。背ハ。女と妹と云如く。凡て
男と敬ひ親て呼詞也。此處ふて。只夫婦の間と。祢

と。に。用ひ。り。○何來之晚也。伊提麻志ハ。古語也。
凡て行。云云。天智紀童謡。伊提麻志。古云云。伊
提麻志能云云。萬葉八梅花開月夜。伊而麻左。自常
屋。古ハハ。かく出。云云。來。云云。上下通
せり。○黄泉之竈。記云。戸。喫とあり。戸。言ハ。竈。字に
當り。民屋を戸と云。又家と數るに。幾竈。幾烟と云。
又竈と。開都比と云。と合。此ハ。黄泉の竈
云。炊きたる物を。食。云云。○雖然。吾當寢息。
此處語足。脱文あり。記云。然。愛我。那勢命。入
來坐之事。恐。欲。還。且。具。與。黄泉神。相論。莫。視。我。と有。

此傳、と同一書なり。此の文も、イコヒテ雖然吾且當
イコヒテ寢息所見、ニなりと有し。三四字を脱し、イコヒテほむありとん。
○請勿視之。鎮火祭祝詞也。夜七ヨナ夜晝ヒナ七日。吾乎奈見
給比曾。吾奈妹乃命止申給比支とあり。談辭なり。ら
も古き時、イコヒテのりなり。○不聽陰取湯津瓜櫛
云云。下卷。豊玉姫命段も、彦火と出見、尊不聽。猶以
櫛燃火視之時と有て。總ての趣もよく似たり。當昔
乃古話にありしこと。故也。此も彼にも出し、カシコふこ
そ、イコヒテ湯津ハ既ふ云。五百箇の約。瓜櫛ハ密齒櫛
ふて、五百箇と齒の密結をなると云。今世に言はれし

重く結きて、間隙の無きをげ、目か密くると云。是也。
此を勝間のまるとする。瓜津なり。櫛ハ本串と同く。刺
は就く。名なるとん。古の櫛は長とあり。此も秉炬と
さしにても。志るし。○雄柱。記ふ。男柱。字鏡也。幢柄槁
梁之左右之柱乎。止古柱と有。○虫流。虫ハ、蟲の省文。
記ふ。宇士多加礼斗呂々岐豆と有。とろけとる也。盪又
溜、字れ意。イコヒテ俗ハ、イコヒテ煎汁と、やろく。此も、かの泉津竈食
取合せて、珠更ふ穢醜く設出るとりて、且ハ、兒輩の
耳をおどろく。且、黄泉を悪みて云也。今本此
處ハ、忌一片之火云云。れ文あり。乱とる也。古本

うは七行の末亦自来追下に出る。必以其延ふ有
べきあり。○不意。文選注云。不圖也。○不須也。凶目云
云。伊那ハ。辞。吾々。惡。厭。言。なれハ。不須の字を當
るなり。字書は。須。凶。ハ。萬葉に。鬼乃益ト雄。志許。霍。公
鳥。是も惡。て。詈。詞也。されと記ふ。志許。米岐とあ
る言。此意。年来心得。る。かり。辛。く。思。ひ。得
る。る。る。此ハ上代。の。兒。所。作。り。出。て。今。世。に
も。兒。童。等。の。物。と。不。欲。む。と。記。眼。下。へ。指。を。刺。入。て。驗。を
返。して。赤。牟。陪。以。と。云。是。也。此ハ其。目。つ。き。れ。お。く。く
く。醜。き。と。以。て。醜。目。と。云。なり。下。の。忍。德。丹。尊。

天降、條子、不須也。頗、頌、凶、目、杵、之、國、と書れ。も。頸
と横ふ振て。不須と云いて。今も兒の言に。頗、頌、
と。と。い。い。又。不。欲。む。形。容。と。田。舎。け。言。ふ。横。加。夫。之
や。い。い。皆。兒。の。す。る。態。あり。故。て。の。凶。目。杵。ハ。醜。目
反。加。間。志。の。三。言。伎。と。約。の。義。ふ。て。彼。指。と。刺。入。て。目
驗。と。反。れ。を。云。なり。此。江。戸。あ。て。ハ。赤。牟。陪。以。と。云。を
伊。豆。伊。東。邊。ふ。て。ハ。今。も。醜。反。と。も。醜。目。反。と。も。云。と。
其。地。の。人。語。る。き。故。此。を。既。ふ。總。論。ふ。も。云。は。れ。と。
更。に。く。や。わ。る。也。
是。ふ。合。て。彼。食。泉。之。竈。と。云。も。猶。上。代。け。一。つ。の。諺。ふ

るるんとぞ おぼしき 其をそのうみ 葬送のとら
亡者に供する饌といふ 乞食者の請求して食ふ 其と黄
泉竈食とぞいひ多し 此れ果陋く垢穢き限るな
まろしうし 誇りそつて 幼児等にきくればうら
目覺ふとぞ せしふありきん 止者の饌とぞ
下卷 天稚彦 殯條に 宗人者あり 御食人あり ます
武烈紀ふ 籾 臣と 影媛う 葬るる 哥に 抱摩該 徐播
伊比佐倍母理 云云とあり 即是也 今も鄙乃 葬禮
ふけ 御食持あり 其供膳の食ハ 乞食者も 快くそ
不食ハ 其より 置弃る 処も ありき 又七日迄ハ 墓所
不食を 立て 日炊て 奠る 所も ありき 其を乞て
食ふ かり ありき 早むる 古も 然りき 孟子 東郭
播間之 祭者の 比喩と 名れば 彼國も 然る 有り
と 猶下の 一斤火 條に 云く ぞと 考合はべし

○泉津醜女八人云云 此醜女ハ 醜き意ふをあらは
葦原色男なとの志許ふて 強剛りなり 欽明紀ふ
魃女と書るも その意也 日狭女ハ 日隅宮の日隅と
同しく 幽冥れ 惡鬼なり 故ふ 潜女とハ云フ 隠れて仇
まろしうし也 されハ 此ニツハ 怕き物の類に 云ふにそ
ある 三代實録ふ 筑陽坐志去日女命 帳ふ 出雲國意
是と云る 名ゆ 名の似し 故ふ 引されど 慥う なるは
○背揮以逃矣 揮ハ 振也 萬葉に 山振 皇極紀ふ 揮劍
古事記ふ 振風比礼 あり 是又 稚子れ 作行を 摸
せし 今も 兒童等の 逃ると 記 後手に 物と 振

々走りるるはり。凡て自然^ラなる態ハ今も古も加
らるるあり。下の彦火と出見尊段^ル。以此^ヲ此^ニ鉤云云。
後手^{ニテ}投棄^テ與^テ之^ニも貧^ニ鉤云云^ト言^ヒ訖^テ。則^チ可^ク以後^ニ手授^ケ賜^フ。
とあるなとも。稚子の為態^{スル}と摸^ルせ^ル也。○黒鬘^シ此^ハ
頭の鬘なれど。加豆良^ハ本草の葛^カより出^ル。此^ハ紀
萬葉等に磨^キ左^サ棄^キ豆羅^ラ記^ス。登^ト許^コ呂^ロ豆良^ラま^ル。都^ツ豆良^ラ和
名抄^ニに千^ア歳^マ藁^ラ百^ホ部^ツ字^ラ鏡^ル。忍^ハ冬^ス須^ヒ比^ズ豆良^ラ。此^ハ外^ニ穀^多
名抄^ニに今^ツ都^留と云^フ物^也。此^ハ都^ツ良^ラの轉^リ。弓^と弦^と萬^葉に
由^ユ豆^ヅ良^ラと^リ。馬^具れ^ハ轡^ヲ頭^ナく^ル。都^ツ良^ラも皆^草
の蔓^ツより出^ル。頭^ノ飾^カも^ハ上^ツ代^ハ怒^リと^リあり。

次文^ニ化^ニ成^ル蒲^陶とあると^レ。名^ハ此^ハ玉^蔓なり
るし。蒲^萄の實^ニ成^ル形^チ。玉^蔓の黒^玉に垂^ルるに
似^ル。○蒲^陶陶^萄同^シ。和^名抄^ニ衣^比加^豆良^ラ乃^實紫
葛^和名^衣比^加豆^良と有^ル。其^蔓に鬘^{あり}て。蝦^も似^ル
るる。名^とな^れる也。○瓜^櫛云^フ。名^義上^ル出^ル古^へ
の櫛^ハ竹^も造^ルん故^ル。筍^に化^スと云^フ。云^フある下^へ
卷^一書^ふも。老^翁取^テ囊^中。玄^櫛投^レ地^ニ化^ス成^五百^箇竹^林
とあり。右^の蒲^萄も筍^も一^書の桃^子なくも。皆^皆
稚^子に愛^テ翫^ぶ物^{なり}。故^ル。取^出るる。既^ル云^フが如^し。
○筍^ノ字^鏡和^名抄^共に多^ク加^年奈^とあり。後^物も。

たううちと云ふ。此等ハ音便ルテ竹茅菜ノ義ナラシム。
但シレハ食物ハ時ノ名ニシテ古クモ恒ニ竹子ト
云フ。此處モ枝食トアレハ菜也。○忌ニ片之火云云。
延喜私記六卷本云。令裏書云云。新墓點スニ片之燈トと
あり。按ル。彼トヨ常夜往ユクト云フ故事ナ擬ナテ。上古新墓に
ハ。燈ト背ケテ。小暗フククナシ。おろし。凡テ石
窟イハ段ノル。倣フフ。多クうレハヤク。

後ハ物ヲなウ。岩垣沿ヒト云物語書ニ。たづきモあり。
ぬ山ニ行クレ。ぬ云云。あリ。とくニ。森
の陰ニ。かク。一つノ。火ノ。名ヲ。けル。墓所。を
さシ。人モ。やア。とリ。ゆケ。バ。又モ。名ヲ。けル。あり

ぬと云ふ。これハあるなうけさまあれハ中昔の未
迄も。はらあり。やのりり。

いま此處ハ物さひし記ものに取テ。談りそんちり
し。忌ト。けレ。然ラ。うチ。すク。人ノ。死シ。時ニ。わケ。なレ。ハ。
平日ハ。忌ニ。にシ。次ノ。一冊。書キ。片ノ。火ト。有リ。今ハ。此ノ。文ト。
本ハ。然ラ。うチ。ありテ。其下。ノ。註文。なりん。とモ。おカ。き。

○泉津平坂記ハ。所謂イハユル黄泉比良坂ヨモツヒラサカハ者。今謂ニ出雲國ノ之
伊賦イフ夜坂ヤサカ也トあり。如此カ。名ハ。皆ハ。語リ。人ヲ。設ケ。
たふて。佛書ノ。死出。山ニ。三途ノ。川ノ。西河原サイカハなク。類也。彼ノ。風
土ノ。記ス。意ヲ。宇ノ。郡ニ。伊布夜社イフヤヤ名ス。又モ。出雲郡ノ。宇賀郷ノ。海

濱ふも、黄泉之坂、黄泉之穴と云處あり。此穴ハ、毒氣ありて、入し人の死すや、ありき。故ふ、然う名け、又彼、伊賦夜坂ハ、夕闇坂の義あり。小暗き山坂なり。故ふ、然う名けし。也。鎮火祭祀詞、与美津枝坂とあり。例の談辞のよりに引る也。泥むべう。○千人所引磐石、言の義、此ふ書了字、如し。萬葉四ふ、千引乃石、古事記下に、五百引石とし、何と。○塞、記ふ引塞とあり。佐開ハ、令障也。と、冬不多岐豆と訓へし。○相向、下の誓約、段竹か、りも同し。萬葉八、天漢相向立而まゝ、河向立む、あり。○建絶妻之誓、記ふ、度事

戸とあり。訓ハ、記ふ依り、よみ、意ハ、此ふ書了字に就了解へし。此言の意、諸抄むけふ通えり。今按ふ、先づ登と名、男女共り。陰と本にて、美乃久美斗、床所嫁、接なとの登、是也。これハ、記ふハ、上比賣者、如先期美乃阿多波志都とあり。此、與したる登と、別に、い、即、別婚と云んが如く、今、俗ふ、離縁と云に當れ。故、此ふ絶妻と書、次、一書、族離と書れし。也。建、字ハ、今、建誓言と云意、以了置る也。又記ふ、依り、わ、れと訓ハ、私記ふ。如言、度と云る也。萬葉十九、三、丁、玉梓之道、尔出立、往吾者、公之事、跡乎負而之、将

去[△]此ハ家持御越中の國より京へ上る時餞せし人
の報へたる別れの歌なり。此事跡も離別の辭と
云て其を忘れず心も持て行んと云る也。又舊事紀
爾遂建^ニ絶妻之誓^ノ渡其^ノ事^ノ戸^ノ之^ノ時^ニとある理もよくし
實^ル一ツの誓^ヲなれ。次文にも盟^ニ曰^クとありて速玉之
男神事解之男神たると顯生し終つると記傳ふ琴と
渡れるると云るあるが中にも特ふ拙し天詔琴の
ハ神功紀^ニ委^ク弁^シふ^ル。○國民[」]記^ス據^テ人草と
よむ青^ヲ入^ル草^ハ草^ノの益^ヲふ^ルび^ク茂^ルに譬^ヘたる
稱^ナなり。故^ニ蕃^息に用^ハる^ル處^ニをい^ハる^ル心^ヲ

はくべし大被詞^ハ天^ノ之^ノ益^ノ人^トと云ると同意也。○日
將千頭^{云云}日將千五百頭^{云云}此ハ産靈^ノ神^ノの御靈^ト
徳^ハ此^ノ世^ノ間^ハ人^ノも萬物^も年々^ニ増加^シて次第^ニ
榮^ルる由^ク理^ヲと兒輩^ノのた^リに^ニ縊^殺なり。わが
お^ハら^ハ九^且近^ク採^取て^テ諭^セる^ル文^言也。○岐神[」]字
は衢^ノの意^ヲ訓^ハ御^稱也。記^ス衢^立船^戸神^一書^ハ投^テ其^ノ
杖^曰自^此以^還雷^不敢^來是^謂岐^神此^本名^曰來^名戸^ト
之^祖神^トあり。ハ船^戸ハ勿^レ來^止れ音^ノの轉^シたる
也。道饗^祭祝^詞云^ハ大^ハ衢^ニ湯^津岩^村之^如久^塞坐^皇
神^等之^前申^久ハ衢^彦ハ衢^比賣^久那^斗止^御名^者

申互タヘコトヲヘツラクハ稱タ諱コトヲヘツラクハ竟マツラクハ奉マツラクハ久マツラクハ波マツラクハ根マツラクハ國マツラクハ底マツラクハ國マツラクハ与マツラクハ里マツラクハ鹿マツラクハ備マツラクハ疎マツラクハ備マツラクハ來マツラクハ物マツラクハ尔マツラクハ
相アヒコリアヒクチアフコトナクテ牽アヒコリアヒクチアフコトナクテ相アヒコリアヒクチアフコトナクテ口アヒコリアヒクチアフコトナクテ會アヒコリアヒクチアフコトナクテ事アヒコリアヒクチアフコトナクテ無アヒコリアヒクチアフコトナクテ互アヒコリアヒクチアフコトナクテ云アヒコリアヒクチアフコトナクテ云アヒコリアヒクチアフコトナクテ○長アヒコリアヒクチアフコトナクテ道アヒコリアヒクチアフコトナクテ磐アヒコリアヒクチアフコトナクテ記アヒコリアヒクチアフコトナクテ云アヒコリアヒクチアフコトナクテ道アヒコリアヒクチアフコトナクテ之アヒコリアヒクチアフコトナクテ長アヒコリアヒクチアフコトナクテ乳アヒコリアヒクチアフコトナクテ齒アヒコリアヒクチアフコトナクテ
とあるに據て訓へし即道之長路間尔坐神の謂也
萬葉廿尔道之長道三ノナガチ道之長手三ノナガテとあり手ハ知
此通音也中古哥は道の行手とよめりも道之行道
と重ねし連け也又四條繩手ナガチと云も長道と訛
也○衣ミミ美ミ祈ミ之ミハ御ミ著ミ也八千矛神歌萬葉等尔
出ツ許コ呂ロ毛モハ著キル物モノの義ミ美ミ曾ソハ御ミ龍オノ衣イの中ナカ畧リョク也○煩ワザレ神
煩ワザレとそ物に障り滞りしと云萬葉五尔可尔可久尔思
和豆良比ワヅラヒ称ネ能ノ尾ミ志シ奈ナ可カ由ユ又病ヤムと云も此意より轉

衣ハ然シカドり云へきもの也○禪ゼン字鏡ジキョウ志シ太タ乃ノ波ハ加カ万マン
和名抄尔袴ハカマハ賀カ万マン禪ゼン須ス万マン之シ毛モ能ノ一イチ云クニ知チ比ヒ佐サ岐キ毛モ
乃ノ如此カク別ワケてよふハ後ノチの事也皆波加麻ハカマと云へし佩ハキ
裳モの義ミふし毛モと云に纏ヒツりかちする事あり雄畧紀
ふ多タ倍ヘ能ノ婆ハ伽カ摩マと有リ○開アキ嚙グチ神カミ記キ云クニ道ミチ侯コウ神カミ尔ニ作シれ
るは是コトハ其ノ一ノ名ナ也開アキ嚙グチハ開アキ口グチに袴ハカマの口グチは開アキた
ると云よ其禪袴ゼンカマの別ワケと行ユク巡メれり状シマ道ミチ之シハ嚙グチ尔ニ似
しり神名帳尔和泉國大鳥郡開口神社○千敷神道及
のこみりて伊弉冉尊イサハヒノミコの追オヒ及キ路チと以モて称ナはる

履ハ道と経て来る物なれば。道及と云ふよしあり。
○所塞^{サセリシ}神武紀。久治良佐夜流。萬葉五。奈尔可佐夜礼
留^ルと有。塞ハ伊井諾尊^ニ就て云。所塞ハ石ふ就て云。
人の為と。自ら然るとの差別也。○道反。此ハ幽界よ
り溢^フき来ん凶禍と。追^ヒ反し。塞留^{セキ}り路^{ミチ}より一の称也。
○所謂^{イハユル}泉津平坂者云。此と後人のさうらと云。
なれば説ハ己う惑いと覆はんとも也。上文に。世人或
有^ニ雙生者象^レ此也。まゝ處々。小嶋^ハ皆是潮沫凝成者矣。
まゝ。是時天地相去^リ未^レ遠^クなりと云る類にしてその
み兒童に後り聞とも人の自註ふとして。いつゆる冊

子地の詞なるとや。猶次しの文にも。此類の多
ると。唯是のみを難せらハ。黄泉と地下とせし説の
立^レなるとを以てなり。舊事本紀云。凡^{スレ}厥^ノ所^ニ謂^フ泉津平
坂者^ハ云云。同^ニ一本云。畧^シ云云。氣絶之後^ニ謂^フ斯^ノ之^ヲ歟。謂^フ出
雲^ノ國^ニ伊^ハ賦^ヤ夜^サ坂^ト者^モ唯^タ辞^ト耳^ニとあり。是を以て。彼醉^ヒハ醒
しはへし。又此文に依に。此紀今本等に。氣絶之際と
あり際字ハ。後の誤なりと考へられしなり。
○此一段の大意ハ。女神。火神と生坐^シて後。隱^レ身^ラて又
えんなりまゝ。男神も其所以。考へるは。あ
らねど。年来の御親しみもあらう。いふ所し。又

らひ餘し^コ所^レも^レあり^レけれ^ハ男神^カを慕^ヒて
追^ヒ幸^ニして^ハ幽冥^ニ入^リ坐^シは^シ此^ノ際^ノ誰^レ知^ルべきに^ハあ^ら
む^カ神代^ノ傳^ヘ來^シ古語^ヲ酌^シい^はら^るか^らら^る
して^ハ女神^ニ會^ヒて^ハ申^シ孫^ハい^まま^ニ神功^{アリ}あ^まる^餘
ま^らり^今一^ハ現^レ世^ニ出^テ御子^産ま^ると^告し^テ
孫^ハに^ハ女神^カが^レ聞^クて^ハ吾^レ既^ニ現^レ世^ニ在^リ
て^ハ顯^ル事^ハ為^スべき^限を^レ悉^ク為^シ盡^シつ^テ大業^ヲ成^ス功^ニ志^ス
あ^まる<sup>幽冥^ニ助^ケけ^る能^ハら^ると^吾夫^君尊^モ詔^ス
ひ^ぬ故^レ今^ヨり^ハ顯^ルと^幽と^立別^シて^ハ神量^らん^とて^ハ
如此^カ幽冥^ハ入^ルん^とぬ^宣ふ^やら^に未^タ天上^ノ黄泉^ニ</sup>

夜^ル日^ル所^レ治^スべき^大君^モ生^リ彼^火神^ノ顯^ル出^ルと^一
限^トして^ハ今^ヨり^後ハ^吾幽冥^ニ護^ル幸^ハ神量^らん^とて^ハ
日月^神も^顯坐^ル孫^ハと^らや^汝尊^ハ現^レ國^ハ還^ラせ^ル
孫^ハと^ぞ申^シ孫^ハ爾^ハ伊^弉諾^尊語^らん^とと^語
は^し示^シへ^ると^示して^ハ顯^ル明^界に^還る^と孫^ハぬ^御
御道^も幽^冥に^觸たる^物と^棄て^孫に^とや^彼
御誓^むれ^しが^らて^衢神^ノあ^まる^顯生^出て^ハ
それ^にも^助け^孫に^ける^とぬ^のり^る幽^冥
顯^ル御誓^ハ阿^豆那^比罪^トて^ハ黄泉^ハ凶^禍の^結れ^來る^と
ぞ^すと^其隔^境と^固く^塞留^て現^レ世^ニ還^ラせ^孫

ひき、と云はどのうと、例の幼言、談辭して、ちとけな
くハ傳へ来しなり、時ふ此段ハ、幽事カミゴトの御上よりけ
りげ、恐を畏み、モトホク迂遠、語り廻し、るものぞ。

伊特諾、尊既還、乃追悔之、曰、吾前到於不

須也、凶目汚穢之處、故當滌去吾身之濁

穢、則往至筑紫、日向、小戸、橋之檉原、而被

除焉、遂將盥滌身所汚、乃興言曰、上瀨是

太疾、下瀨是太弱、便濯之中瀨也、因以生

神號曰、八十枉津日、神次將矯其枉、而生

神號曰、神直日、神次大直日、神又沈濯於

海底、回以生神、號曰、底津少童命、次底筒

男命、又潛濯於潮中、回以生神、號曰、中津

少童命、次中筒男命、又浮濯於潮上、回以

生神、號曰、表津少童命、次表筒男命、凡有

九神矣、其底筒男命、中筒男命、表筒男命

是即住吉大神矣。底津少童命。中津少童命。表津少童命。是阿曇連等所祭神矣。然
後洗左眼。因以生神。號曰天照大神。復洗右眼。因以生神。號曰月讀尊。復洗鼻。因以
生神。號曰素戔嗚尊。凡三神矣。已而伊弉諾尊。勅任三子。曰天照大神者。可以治高
天原也。月讀尊者。可以治滄海原。潮之八

百重也。素戔嗚尊者。可以治天下也。是時素戔嗚尊。年已長矣。復生八握鬚鬣。雖然
不治天下。常以啼泣恚恨。故伊弉諾尊問之曰。汝何故恒啼如此耶。對曰。吾欲從母
於根國。只為泣耳。伊弉諾尊惡之。曰。可以任情行矣。乃逐之。

○追悔之曰云云。上段と。黄泉と。膿沸虫流なり。

云るに就てなり。次、語ども。既ふ出ッ。○日向記、高千穂宮、段ふ。朝日之直刺國。夕日之日照國也。故此地甚吉。地詔而風神祭祝詞ふ。吾宮者朝日乃日向處とある。意とす。又筑紫とあれハ。舊つ筑紫にて日向國と名する。其にしても日神未顯出坐ぶりし以前ふ。とる。辞あり。後より古へ遡て云と。此處ハ理り。是ふつきても日月ハ其以前ふ。有し。自ら志し。○小戸橋之檍原。小戸ハ。小門ふ。河水の落口なり。門のり既ふ出。橋之ハ立走浪之と云。言は。いほとなく然う約れ也。立走浪と

は。彼、河水の程よく立走。て身と滌ふ便。宜き水門を云。即次、文に。上、瀬是太疾。下、瀬是太弱。便濯之中。瀬也とある。是、浪の程よく立走。る門と云る也。本、水門の名なりし。下、卷海神宮、段ふも。橋之小戸。神功紀ふも。橋之小門あり。皆各其處別となり。又檍原と云も。彼、河水の落口ふ。淡き門と云。次、一書に。粟門とあるに。知し。粟も借字にて。水の淡きを云なる也。潮のともあり。底まで潜入。濯き路ふに。堪が。あまは也。これハ立走浪之淡原と心得し。此等のふは。既ふ山彦冊子に。委く弁へたれハ。此ふを擧

取て云なり。○被除。國語云。被除其心。周禮春官。女巫
掌歲時。被除鬻浴。注云。被除。如今。三日上巳。如水上之
類。左傳。襄廿年。祝被社。又作弗。詩大雅。以弗死子。注云。弗。
之言。被也。被除其死子之疾。とありて。漢國も古く
はありし事也。故其字を取て書るなり。被ハ。拂と同
し。物の塵を拂ふ。借財を拂ふと云も。拂除の義也。其
價をとあると云も。令清なり。とて。波良比とよむと。
波良閉とよむと。二義あり。なほ。自為と云。はら
へ。令被と波勢ハ閉。ふて。人ふ令るを云。罪咎ある人
を負ふと。被と云。下は。被具。此云波羅閉都。能。萬

葉十七ふ。敷等能里等其等伊比波良倍。大被な
と云る。皆人ふ令被なり。此ハ御自為。波良
比と訓べし。○盪滌。上文。御身にほろる物を。投棄
ふ。被除なり。是なり。御身の汚穢を滌き。山を。禊
なり。美曾岐ハ身滌の義ふて。被と別也。被ハ。惣名
み。禊ハ。其中の一種なれ。禊ハ。被と云べし。被ハ
禊といふ。禊ハ水邊ふて行ふに。限とる名なり。萬
葉三ふ。天川原。出立。而。潔身。而。麻之乎。六ふ。菅根。取
而之。努布草。解除。而。益乎。往水丹。潔而。益乎。とよみ。分
なり。今俗ふ。垢離と書ハ。填字にて。許里ハ。川降なり。

川降ハ、即禊ハ也。禊音漢國云。三月上巳浴スル于水。と春
禊と云。蘭亭禊事等是也。七月望前浴スル于水。と秋禊と云。
魯都賦云。魏都賦云。滌ハ瑕盪ス穢。廣韻云。盪滌、搖動、
貌。○興言。下卷云。遂到出雲國。乃興言曰。景行紀云。望
海高言曰。是小海耳。可立跳渡。萬葉にも此彼ハ云々。
此ハ恒云。只何となく云々。異ト以て言改て云。出
るト云。魏都賦云。聖武興言。將曜威靈。○上瀬云云。古
く上枝中枝下枝ハ本中未なり。言の文ハ云々類
ひなハうら。此ハ疾ハうら。弱ハうら。其中庸を取ルる
うらハうら。大袂詞の瀬織津姫神ハ。此故事と以て稱

○八十枉津日。舊事紀古事記共云。此
下云。大福津日神あり。下一書あり。大綾津日神と云。
又云。れハ此云々。大枉津日と脱モラ也。○神直日大
直日。右三神の御名義ハ。此處の事ハ意ハ。文面の
上よりハ通カゆれハ。凡て省きつ。鎮魂祭神ハ坐
中。大直日神一座。八幡本紀云。枉津日以下三神。鎮ニ坐
築紫國那珂郡福崎筑紫石邊。かくて此云々云々。
伊弉那伎大神。所生神名八十枉津
日神也。一名瀬織津日神是也。やある細注ハ弘
了。近世の釋ハ。右の枉津日と。天照大御神。荒魂

也と申せしは、然る心得たる人の多う、甚忌々
志々妖説り、そある、そも、荒魂ハ、顯生魂の義
はして、本靈をも、更に別是、孫山とこそ、祢せ、和荒を
やの、荒あけあ、さ、さ、さ、神功紀云、於是從軍神
表筒、男、中筒、男、底筒、男、三神、誨皇后曰、我荒魂、今祭於
穴門、山田、邑也。時穴門、直之祖、踐立、津守連之祖、田裳
見、宿祢、啓于皇后、曰、神欲居之地、必宜奉定、則以踐立
為祭荒魂之主、仍祠立於穴門、山田、邑とある、是、彼、御
時、顯れ、孫山、御魂、神と、祭り、孫山、は、神名帳に
も、長門、國、豊浦、郡、住吉、坐、荒魂、神社、三座、並名、て、こそ

と、祢せ、る、なり、々、又、同、紀、ふ、於是、天照、大神、誨、之、曰、
我之荒魂、不可近皇居、伊勢、大御神の、御所、を、放、り、せ
當居御心、廣田、國、即、以、山、背、根、子、之、女、荒、山、媛、令、祭、と
あ、る、も、彼、御、時、於、禰、日、宮、而、顯、れ、孫、山、御、魂、の、事
と、誨、へ、さ、せ、孫、山、を、り、か、れ、彼、伊、勢、別、宮、坐、荒、祭、
大神も、崇神、垂仁、等の、朝、ふ、顯、れ、孫、山、御、魂、と、祭、れ
る、以、て、儀、式、帳、に、荒、祭、宮、祢、大神、宮、荒、御、魂、宮、と、稱、
せ、る、なり、又、大神、荒、魂、神、と、申、は、な、く、も、顯、れ、孫、山、
御、魂、と、こそ、申、せ、其、神、より、以前、も、顯、生、孫、山、と、荒、御
魂、と、申、せ、る、絶、て、お、し、出、雲、風、土、記、云、天、神、千、五、百

萬^ツ地^{クニツカミ}祇^ミ千^チ五^イ百^{ヒャク}萬^{マン}并^ツ當^{タカ}國^{クニ}靜^{シヅカ}坐^マ三^{サン}百^{ヒャク}九^ク十^{ジュウ}九^ク社^ヤ及^ツ海^{ウミ}若^{カミ}等^{ナニ}大^{オホ}神^{カミ}之^ノ和^{ニギミタマハシツ}魂^{モリテ}者^{アラミタマハミナコトクヨク}靜^{シヅカ}而^{シテ}荒^{アラ}魂^{ミタマ}者^{ハミナコトクヨク}皆^{ナニ}悉^{シツク}依^{ヨリ}給^{タマフ}とあるハ少^シし給^ラハ^ハきやうなれど是も本より付和魂ハ各其所^{シテ}鎮^{シヅ}留^{モリ}て事とある時ハ顯^{アラ}れ給^{タマフ}ハ顯^{アラ}御^ミ魂^{タマ}ハ皆^{ナニ}來^キ依^{ヨリ}給^{タマフ}へと云なり和魂のつら下に云へし○住吉大^{オホ}神^{カミ}太古^{コノ}よりたゞ昔^{コノ}語^{コト}そのやうに語り傳へたる舊^{コノ}辭^{コト}なうら本^{コノ}つ神^{カミ}語^{コト}の空^{カラ}しうしして神^{カミ}功^{イサ}御^ミ時^{トキ}此^{コノ}三^{サン}神^{カミ}御^ミ形^{カタ}とせん顯^{アラ}ハして韓^{コリヤ}國^{クニ}へ導^ミへ為^シ給^{タマフ}ハ奇^{オモシ}と申^{マツ}れし其^{コノ}より取^ケ分^ク重^{オモシ}みせられて神^{カミ}名^ナ帳^{チヤウ}ハ攝^{セツ}津^ツ國^{クニ}住^ス吉^{キチ}郡^{クニ}住^ス吉^{キチ}社^ヤ四^シ座^ザ並^{ナニ}名^ナ神^{カミ}大^{オホ}日^ヒ次^{ツギ}相^{サウ}嘗^{シヤウ}新^{シン}嘗^{シヤウ}とあると始^{ハジ}と

して下^{シテ}卷^{クワン}十^{ジュウ}五^ゴ葉^{エフ}左^サ五^イ十^{ジュウ}八^{ハチ}葉^{エフ}左^サ六^{ロク}十^{ジュウ}三^{サン}葉^{エフ}左^サ七^{シチ}十^{ジュウ}二^ニ葉^{エフ}左^サ七^{シチ}十^{ジュウ}六^{ロク}葉^{エフ}右^{ミダリ}七^{シチ}十^{ジュウ}七^{ジュウ}葉^{エフ}左^サ等^{ナニ}に載^カられて諸^{シヨ}國^{クニ}ハあまの祭^{マツル}られたるも靈^{アラ}驗^{ケン}の新^{アラタ}なる由^ユありたり猶^{ナカ}此^{コノ}他^タの神^{カミ}たちも凡^{ナニ}て此^{コノ}例^{レイ}よていさう御^ミ魂^{タマ}の顯^{アラ}とれさるも何^{ナニ}時^{トキ}ハ顯^{アラ}れ給^{タマフ}ハ測^{ハカ}らうし疎^{コト}ハ勿^{ナシ}り奉^{マツル}る○阿^ア曇^{トモ}連^{レン}等^{ナニ}所^コ祭^{マツル}神^{カミ}神^{カミ}名^ナ帳^{チヤウ}ハ筑^{ツク}前^{マエ}國^{クニ}糟^{サウ}谷^コ郡^{クニ}志^シ加^カ海^{カイ}社^ヤ三^{サン}座^ザ並^{ナニ}名^ナ神^{カミ}大^{オホ}とある是^{コノ}也^{ナリ}阿^ア曇^{トモ}ハ氏^{ウヂ}なり連^{レン}ハ加^カらね也^{ナリ}記^キ云^ク綿^{ワタ}津^ツ見^ミ神^{カミ}之^ノ子^コ宇^ウ都^ツ志^シ日^ヒ金^{カネ}拆^{サキ}命^{メノ}之^ノ子^コ孫^{スネ}也^{ナリ}姓^{セイ}氏^シ録^{ロク}ハ宇^ウ都^ツ斯^ス奈^ナ賀^カ命^{メノ}之^ノ後^{ノチ}也^{ナリ}とある賀^カ奈^ナハ倒^{タタ}せり也^{ナリ}阿^ア豆^ツ美^ミと名^ナる義^ギハ應^{オウ}神^{カミ}紀^キ曰^ク

三年處々海人訕咤之。不從命則遣阿曇連祖大濱宿
祢乎其訕咤。回為海人之宰。とありされハ海人津持と
云ふ約り也。式ふ筑前國糟屋郡阿曇郷あり也。
此氏人の居し処なりん。今も對馬國住吉神社和多加
都美神社社司阿曇氏と云ふ。又壹岐國壹岐郡阿多
弥神社あり。即阿曇神社也。此氏ふ連と賜ふなり。天
武紀十三年に及らるり。○天照大神月讀尊既ふ出
此ハ潮之八百重と可治。とある傳の意を昔より
得たる釋たえてなし。故近世猥ふ暗推して月神と
素戔鳴尊とハ別體ありて同神あり。など云が如き

誑説とも云えり也。今此を近く採て諭さば
月神の御方ハ月と所知と本として相攝る。潮の
盈乾とも掌りぬくとあり。此ハ歌ハ月乃出潮とよ
むが如く。潮ハ專ハ月ハ随ふ故ふ。如此る傳へも有ふ
るあり。但海ふよりて遲速あれど其も大故月讀尊
乃方ふは潮之八百重と云語ありて素戔鳴尊の方
より。海原とのみふして潮のつらむ。心とけく
素尊の海ふ所由の坐るハ下の出たる処なり云
々。○素戔鳴尊此尊も既ふ出此ハ可治天下と
あり。是又此尊ハ黄泉と所治と奉りてありて相

名抄ふ。須髯、頤下、毛也。之毛、豆比介とあり。比介ハ、
毛の義也と云。○啼泣、先註等に、伊佐知ハ、足より
す。事也と云れ。と言の意然るべし。今按ふ、伊
勢、國朝明、郡の郷村ふ。伊佐と云物あり。葦木以て、桶の
状、編結て、赤子と入置、この也。底、下ふ丸木と直て、
兒の泣、ときハ、動搖して慰る故ふ。動の義なるべき
と、伊佐と云ハ、音の轉じしにこそ。此ハ、余が見
國と云、云れど、何處ふし有べきもの記、上卷ふ、爾
かり。又國ふ因て、名の異なるし有べし。
高天、原動、而ハ、百萬神共咲とある。此動、同意にて、
即泣動と云。さしき、さしき、其と啼、伊佐知流と

も云る。幼言の遺るも也。此大神と、如此
兒の状、申さるも、下ふ皇孫と、以真床覆衾、畏と
云る類、ちう、猶此外も、兒に語りし故ふ。兒になして
いへるも、れ、多うも也。又次、文に、欲從母於根、國とあ
るも、小兒の母、跡と追慕て、泣、あるに擬へし。
談辭とて、ちう、皆相合せて悟るべし。
○此段の總意を、例の本文に上ふ就て、のり、
伊奘諾、尊、女神とめ、ちう、契てのち、彼、幽顯御誓の
重き被、除ふ依て、遠く筑紫の日向に、行幸せり。ちう、
滌くべき處とて、覓りて、せ、潔く浪の立走

了淡き水門あり。其処山下、立して先づ八十と多く
此禍をなす。め天神諸の直日、魂と招て身、滌とるに
漸々に清く坐す。ゆき坐すに、六柱の海神出現坐す。又
いよく清く坐すときふ。天照大神、月讀尊、素戔嗚尊、此
三柱の貴き大神、顯出ましぬ。是則女神の幽冥あり。
助け幸へ守護す。終ひし神量に因てなりと。伊弉諾
尊、よく歡喜して、事依し終ひく。天照大神ハ天津
日とをくせ。月讀尊ハ天津月とをくし。相攝とる。潮
の満干と掌りたり人。素戔嗚尊ハ天下とをくし。て
終ふは黄泉國とくし。と記す。如、此事依し終ひ

るに、各其大命の如云云し。終ひきと云はく、のり
と。談辭して、幼く傳へ来に、くはるありける。

一書曰、伊弉諾尊、拔劍、斬軻遇突智、為三
段、其一段、是為雷神、一段、是為大山祇神、
一段、是為高靈龍、又曰、斬軻遇突智、時其血
激越、滌於天、八十河中、所在五百箇磐石、
而因化成神、號曰磐裂神、次根裂神、兒磐石

筒男神次磐筒女神兒經津主神倉此縮此鬼此
 介能美拖磨少童此云云此和多都美頭邊此
 云云善反寵此脚邊此云云阿度此丁反此吾夫君此
 而善反寵此脚邊此云云阿度此丁反此吾夫君此
 此云云阿我此勢此食此泉此之此竈此云云此譽此母此都此君此
 遇比乘炸此梅多此妣此不此須此凶此目此汚此穢此
 云云伊難之居此梅多此妣此不此須此凶此目此汚此穢此
 許賣背揮此志此理此幣此提此爾此布此俱此泉此津此平此
 坂此云余母都此比此羅此佐此可此屍此等此度此愈此磨此理此
 音乃予反絶妻之誓此此云云此許此度此愈此磨此理此
 云云布那斗能加微此穩此此云云此阿波此岐此神此此此

○雷神萬葉三ふ伊加土佛足石歌ふ伊加豆知とあ

了是正訓也但上代雷と云しハ天雷のふなり凡
 て怖しき物其名なりしと次卷の首ふ云べし故雷
 神と稱すは其嚴しく健き積威と稱へたりもあ
 りて一様なり神名帳ふありし出づる諸國神社
 と見合せても知へし其中みそ天雷と祭れるも有
 べく又天雷と掌る神と祭れるも有べし今此なる
 も其とおぼし鳴神體火ふして山より出ると因あ
 りげ也さて漢以来儒者雷と天怒と為ハ穀梁傳天
 之怒者雷也とあるに本依る也又陰陽理と云物
 を以て論ごらる何れも神あるををえらぬと云

りぢり。○大山祇。山祇ふ七種々あり。次、一書ふて見
 たりし。大山祇、神ふ七。同名異神あり。其処ふ申候へし。
 神名帳、伊豫、國越智郡、大山積神社。名神大。今三島
 伊豆、國賀茂郡、伊豆三嶋神社。名神大。月次新嘗とあり。
 此等ハ何とにり。御名義既ふ出。○高麗。麗のりも
 既ふ云。つ高と名。山上に坐と云。又高津神。高津鳥
 などの高。帳ふ河内、國石川郡、太祁於賀美神社。備
 後、國惠蘇郡、多加意加美神社。○燧火也。云。今按ふ。
 燧玉篇。火盛乾也。とあれハ。乾燥て干也。此の註ハ。已
 ろし。下一書ふ。干也とあり。そよき。○伊儺之居梅。積

云。云。梅、下に之居梅の三字と脱さり。但、省きて云る
 處もあれハ。此も本より省て。然ら云るも知。し。

一書曰。伊弉諾、尊。斬。軻遇突智、命。為。五段。
 此各、化成五山祇。一則首化為大山祇。二
 則身中化為中山祇。三則手化為麓山祇。
 四則腰化為正勝山祇。五則足化為籬山
 祇。是時斬血。激灑。於石礫樹草。此草木

イサゴノ 沙石 自^ラ含^ル火^ヲ之^レ緑^{ナリ}也。
此^ニ云^フ之^レ伎^ト音^ハ鳥^一含^リ反^ス。
耶^ハ磨^ハ正^ト勝^ト此^ニ云^フ麻^ニ沙^ハ敷^ハ。

○五段 上^ニあ^リる三^ノ段とあり。何^レも傳^ヘたる其^ノ神^ノの
員^ニ合^セし^テる談^ノ辞也。○首^ハ云^フ云^フ次^ノの保^ノ食^ノ神^ノ條^ニ首^ハ
云^フ云^フ口^ニ云^フ云^フま^ニ頂^ニ云^フ云^フ顛^上云^フ云^フ素^ニ交^ル鳴^ノ尊^ノ段^ニ胸^ニ
毛^ニ云^フ云^フ尻^ニ毛^ニ云^フ云^フ眉^ニ毛^ニ云^フ云^フと云^フる類^ニあ^リて。如此^ノ様^ニ
なる^ニ起^ルの語^ヲい^フてのやうなる^ニを。幼^カ話^トと^ナり。身^ニ中^ハ重^ク遠^ク云^フ。
軀^ニ殼^ト也^ト云^フと云^フる^ニ今^ハ衣^ノの袖^ハ無^キと。身^ニこ

ろと云^フ。是^レも同^音。ま^ニ枕^ト丹^子に。む^ろろと云^フと云^フる
くや^{あり}。○麓^ハ端^ハ山^ノの義^{ナリ}と^ナり。又^ハ筑^波山^ニあ^りる
る^ニ葉^ノ山^ノの意^ニして別^也。穀^梁傳^曰。林^屬於^山曰^麓。
萬^葉に。踏^本の語^{あり}。此^ハ麓^山と書^ルる^ハ山^字衍^ル。
如^クなれ^ど。山^祇も連^ける^ニ故^也。○手^ハ執^ノの義^{ナリ}。
て。知^チと約^スると。第^四も轉^テ手^トなる^ニ例^{あり}。女^乳幟^ト。
鈎^チ等^ノの如^ク。執^スる^ニ物^ハ。猶^皆知^トと云^フ。○腰^ニ重^ク遠^ク云^フ。
越^也。在^ニ上^下身^ノ之^界。故^配坂^トと云^フ。此^ハ説^ハお^ろつ^られ
し。腰^とあ^らむ^とい^へば。屈^ノの意^{ナリ}。足^とあ^らむ^と云^フハ
歩^ノの意^ニて。此^ハ等^ノ之^ハ髓^ノの湏^ふて。身^軀に付^くる

